

特41

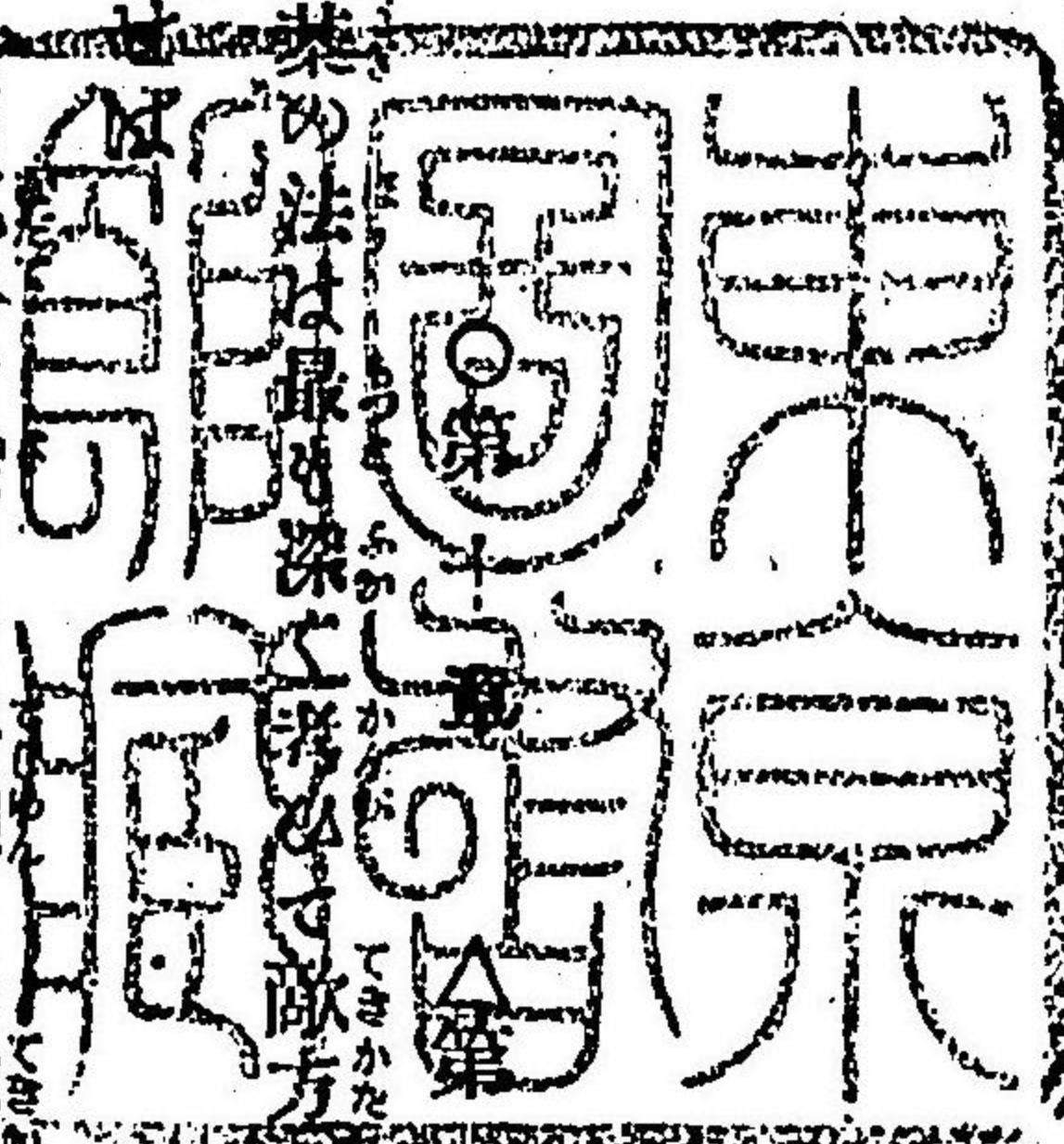
823

三十日
將暴獨習新法

坤

三十日 將棊獨習新法

坤の巻



五段允可 濱島龍水稿按

無段 伊東蓮窓筆受

詰手定跡

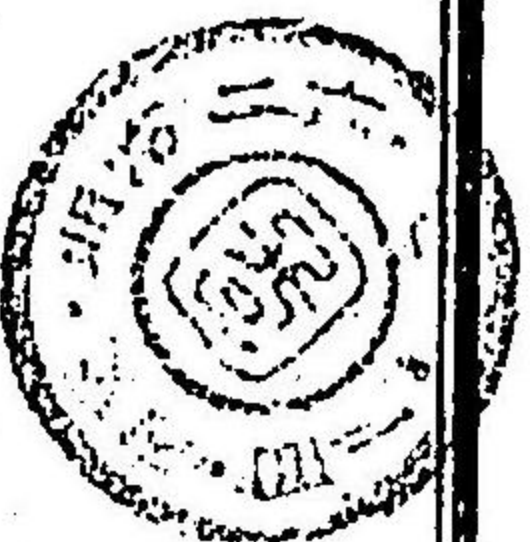
詰將棊の法は最も深く考めて敵方の王を詰め負す心得あるべし、其敵方の王を詰め負さんと欲せば

第一 敵方の王を追詰むるを専一と爲す可し

第二 新たに駒を打つには能く居駒と一致合同して其勢力の逞しからんことを考ふ可し

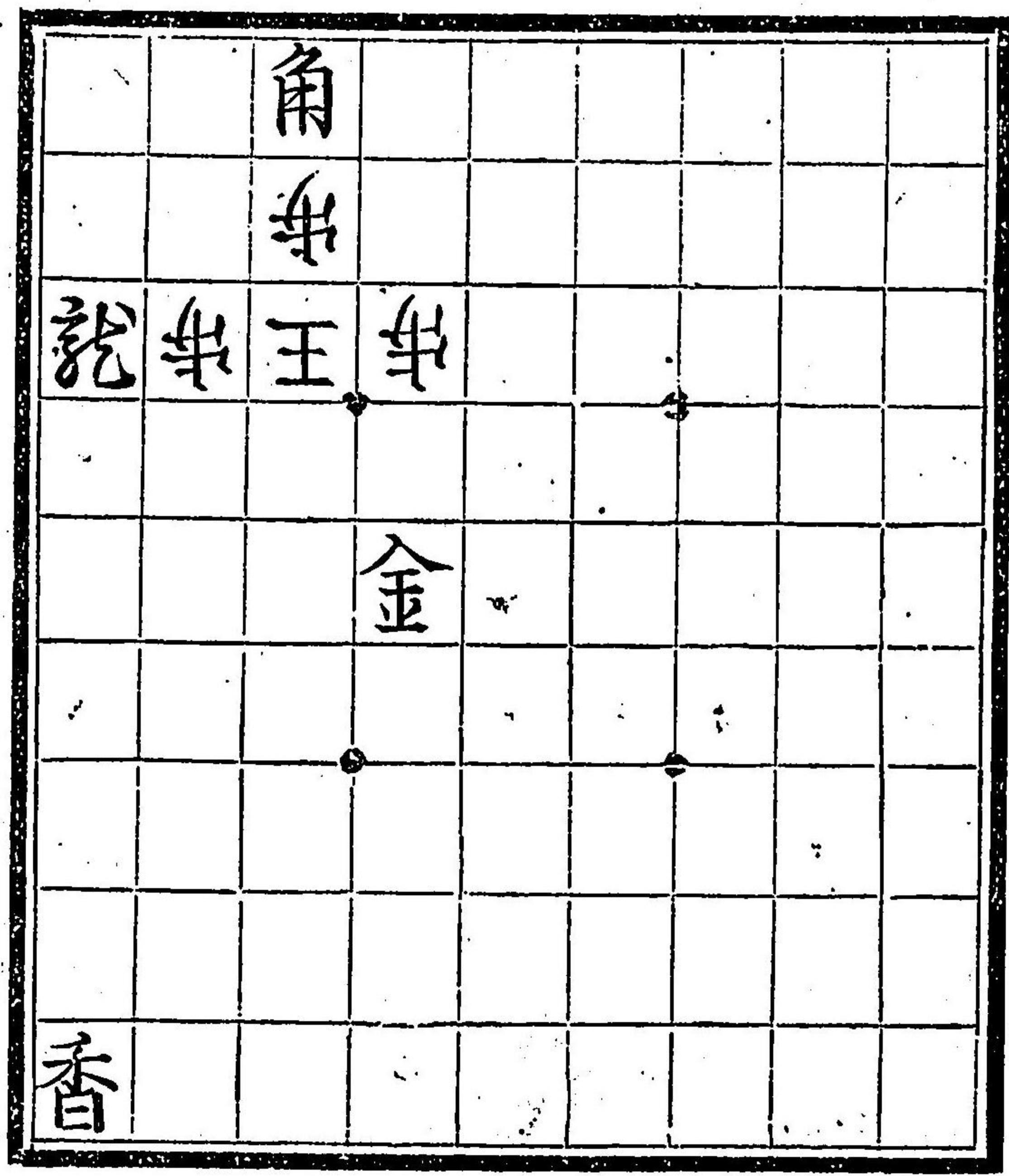
第三 捨つ可き駒は毫も惜氣なく速かに捨去りて先きくの指し手、手数を算へ詰め込む可し

以上に述べる三項は詰將棊の一大秘訣にして、他に此秘訣に勝ざるもの決して之をあらざるなり、故に此三項の秘訣を心得て詰手を指習ふ可きなり



此三科二十五種の誥手定跡は一週間に獨習したる可し、尤も其獨習したる跡を悉く暗んずるを要す、若し然らざれば到底習業の効なき者となる可くに付き、此意を凝めて其習業の効を期せざる可らず

廿四日目の壹
第一壹圖



歩

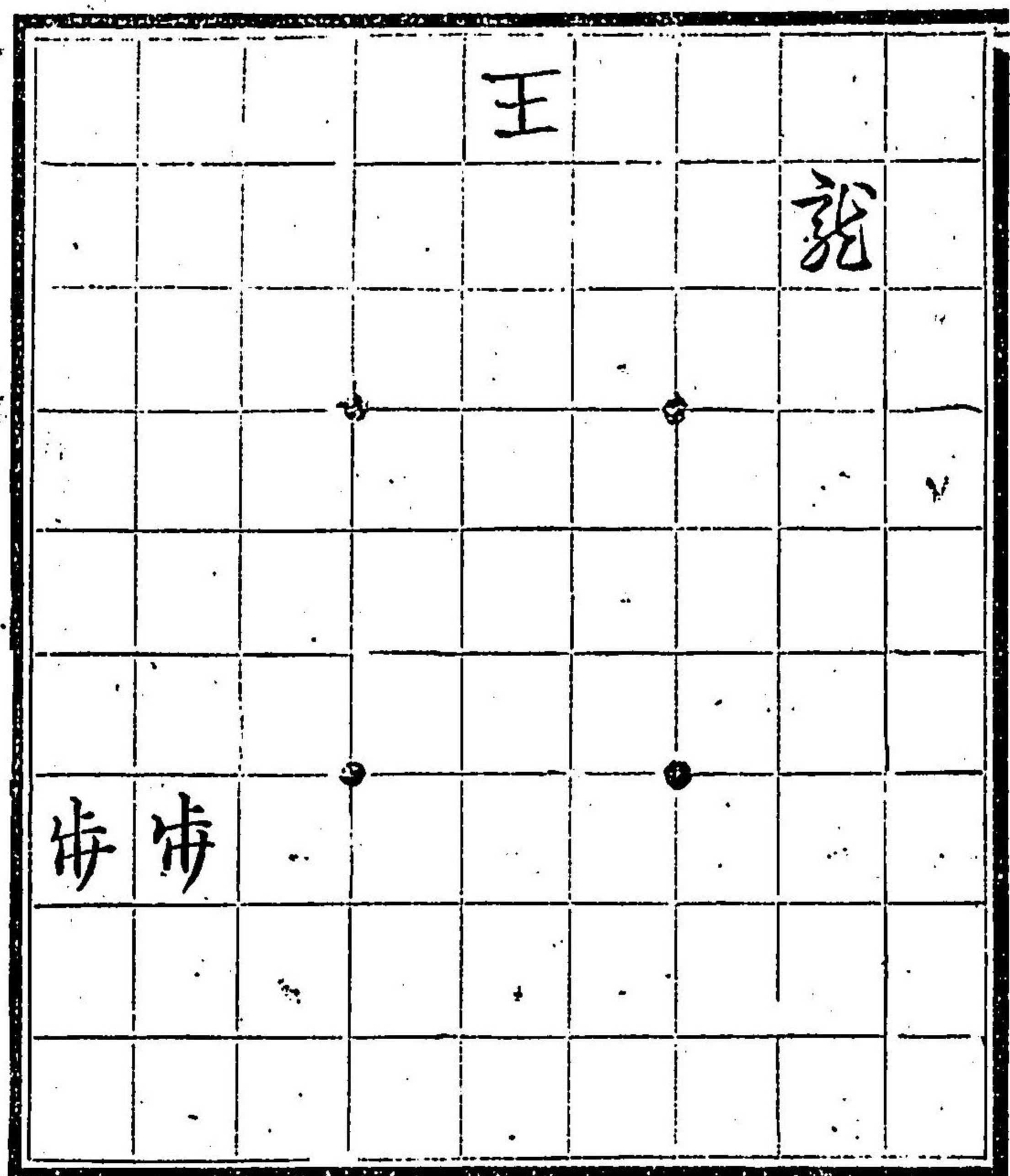
(説明) 八龍八玉七龍全 玉七步八王九角ナル八玉七馬

此詰手は特に初心の人の爲めに示すものにして、是れより順を追へ次第に駒數及詰手の込み入りものを掲げて示す所あらん、然れども余が此最も分り切れたる詰手を特に撰みて初心の人に示すものは、抑も亦た深き考ひのある事なりとす仍て聊か其理由を左に言はん今初心の人に此定跡圖を示し之を如何にして詰るかを問は、必ず先づ七四に歩を打つ事なるべし、然れども歩を打て玉手をする事は本法に違ふを如何せん、然らば八三龍と寄りて玉手せんか、是れ未だ緊切の玉手と言ふを得ず、然らば則ち如何して此定跡を詰るかと思ふに、既に前に説明する如き手段を以てするなり

然れども或は初心の人七三龍の手は冗手なりと疑はんか、左り乍ら八三龍の手又は九三香成るの何等に較ぶるに其勝すること萬々なる可し、而して七三玉の時に七四歩を打つを咎めんか、此時の歩は初め歩を以て玉手すると異なりて唯だ七三の玉を八四へ退出す爲めに打つもの故、彼れと此れと同一視するを得ざるなり

二の目日四廿

圖貳第



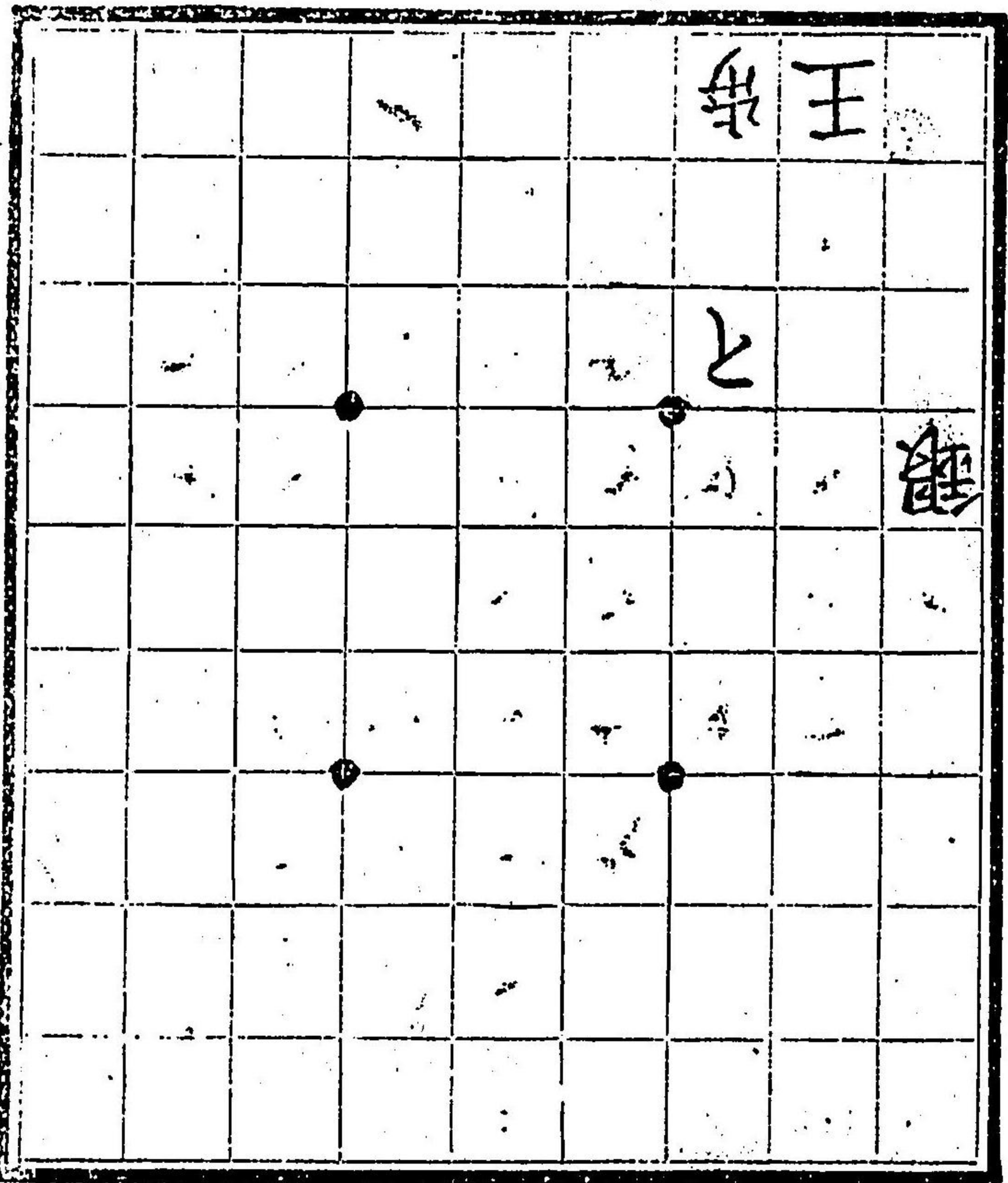
香桂

(説明) 六桂六玉七桂 ナル全 王七香八王七香九王三金九王八龍九王三龍五王六歩 全 王八龍

此詰手は持駒なる桂香を使ふに一大秘訣あり、故に若し持駒の桂香を使ふに其打所宜しきを得ざる時は、決して其詰ざることを心に銘し最も能く其使ひ所を撰まざる可らば、初心の人此詰手を考ふるに先づ桂を四三より打つとせんか、桂を四三より打つ時は結局手透きになるを如何せん、然らば先づ香を王頭さに打つとせんか、成り飛車の運動を留むるを如何せん、此に於てか六三より桂を打ち七一に其桂成りて以て王を詰るに、漸次緊切ならしむる手段を施すものなり

次に香を打つに遠く七九よりするは、蓋し後に二二の龍を八二、八三、八六等に廻して追敵王を詰るに便宜ならしむるの伏線と爲すにあり、誠に深遠精密の手と評せざるを得ず七二金の時に八一の敵王九二へ廻たらば七二金を八二へ寄せせんか、將九七一へ突かんか共に是れ詰手を緩漫にする恐れあるに依り、七三金と引くものなり

三の目日四廿
圖 三 第

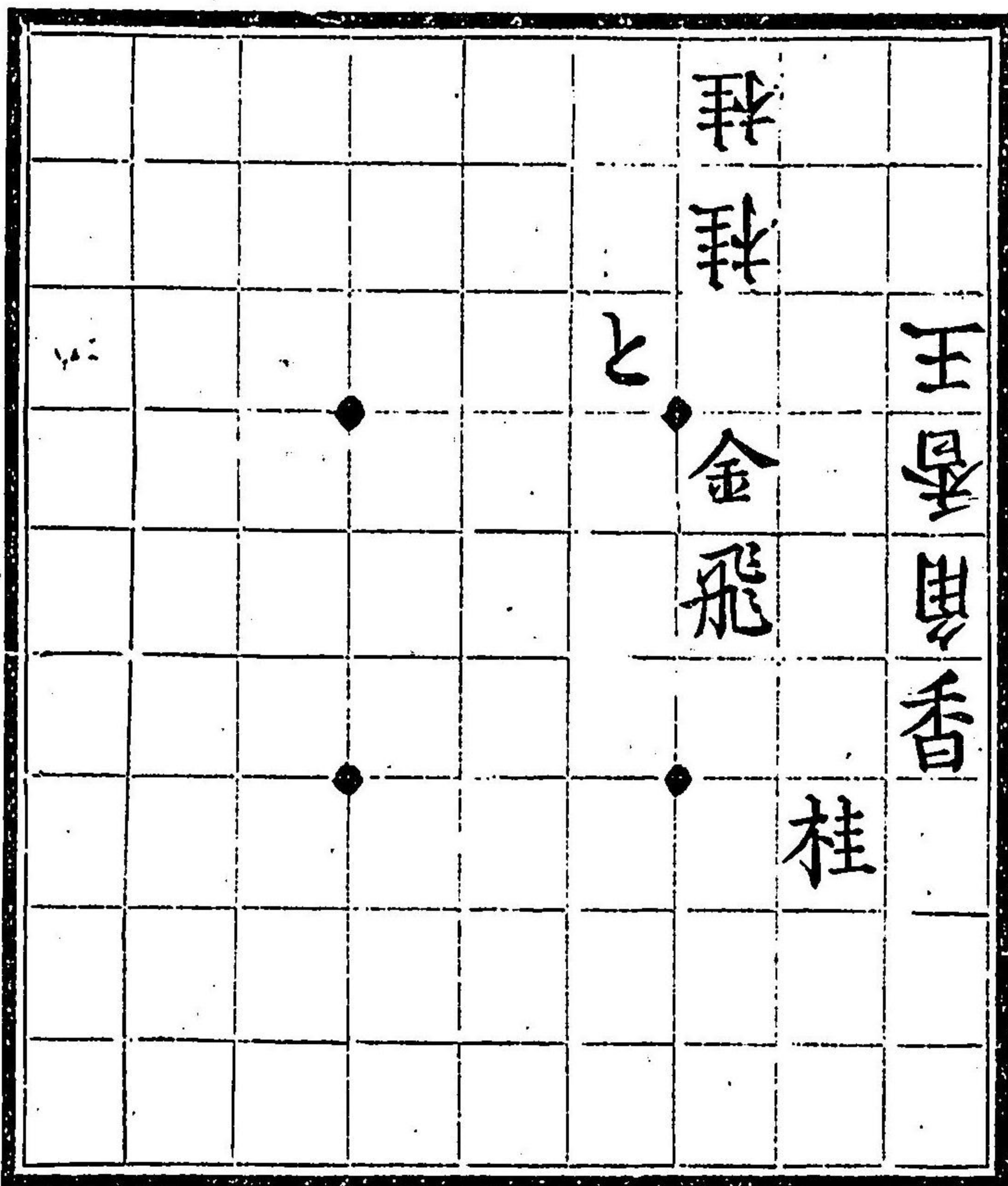


香歩歩歩歩

(説明) 九香二銀二歩一王二歩全銀二歩ナル全銀二歩全王三香ナル一王二歩全銀二と
 二九香と打ちし時に先方に於て二三銀と下るに付き、二九香を以て其銀を取らんか手透さ
 になりて宜しからせ、仍て二二歩と打ちて敵王を一へ入れ面して一二歩と打ちて二三銀
 を一二へ下らせ、次に二二歩成りて一二の銀を二へ下らせらるものとす
 此の如くして一二歩を打つは一王をして二へ上げ、以て二九香を二三へ成りて早く詰
 んことを、計らんが爲めの趣意なり
 然れども二二銀の睨み居るは詰方に取れて甚だ邪魔なれば、勢ひ一二に歩を打ちて其銀を
 上げざるを得ず、銀既に一二へ上らば二三の目に對する睨み駒なし、茲に始めて二二と
 行きて全く詰了るものなり

廿五日目の壹

第四圖



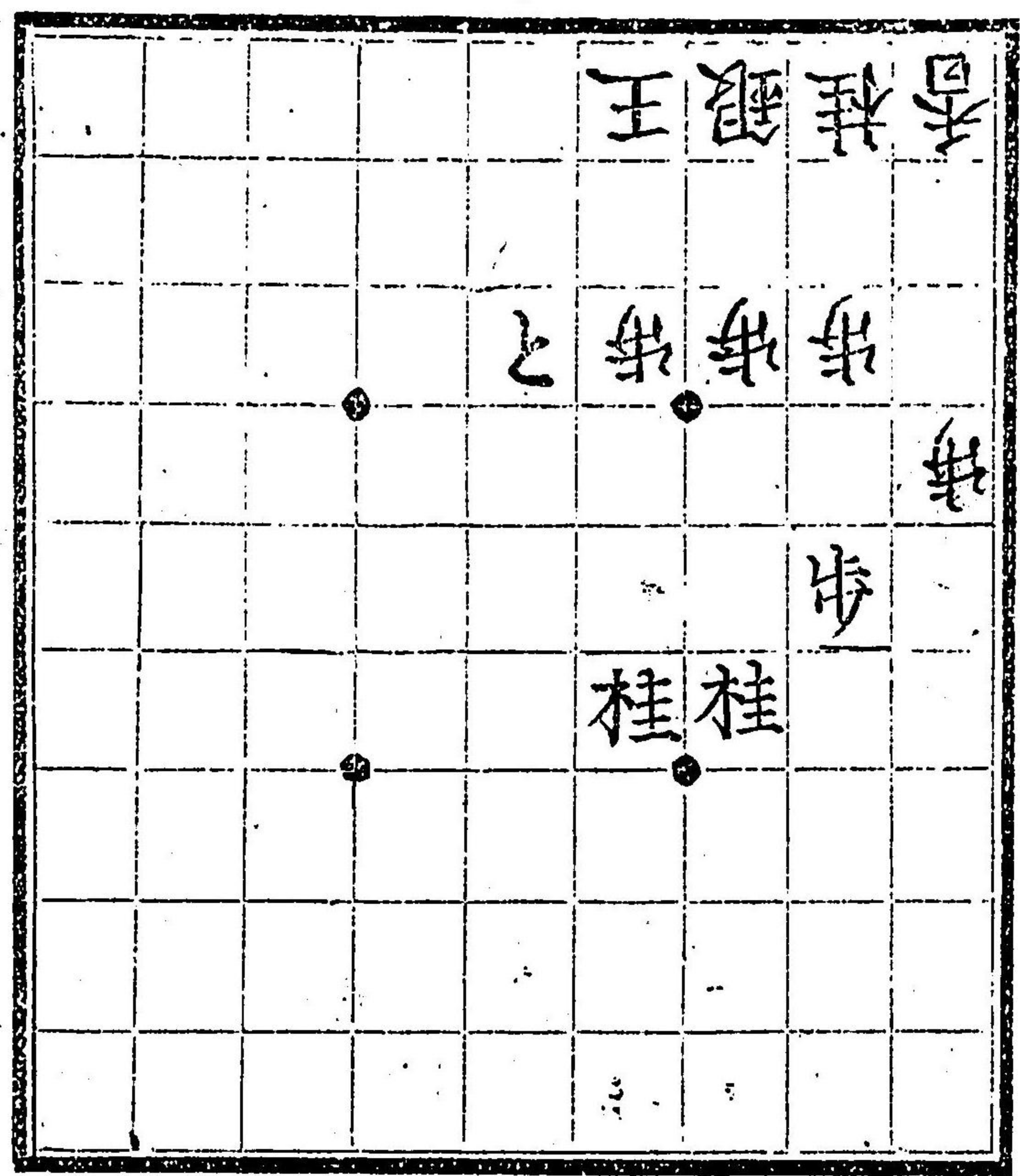
角歩

(説明) 四金全玉二角三步間全角ナラヌ 三玉二角二玉二歩二玉三飛三玉二桂四玉五龍三玉一桂全香三
 と二玉一香二玉二香

三四の金を二四に寄せて玉手するは、四二に角を打ちて玉手せんが爲めなり、又三三歩を
 四二の角にて取るは敵玉を二三へ下らせ、又一三より歩を打つは二二角を取らしめ、次に
 三三飛と行きて玉手を迫らんことを欲するにあり、否な唯に玉手と迫る爲めのみならず、
 敵桂の三二にあるものを取りて之を二五より打ちかけ利用せんが爲めなりとす、何ぞ其用
 意の深遠なるや老練の將棋家にあらざれば、能く此の如き深遠の手を看出すことを得べか
 らざるなり、初學の人能く此處に眼を注げよ

二五桂と打ちて二三に居る敵玉を二四に上らせ、三三の龍を三五に引き一五桂と上りて彼
 我兩香の間に居る角を攘ひ置く手は、後らに至り五五香と突き敵玉二一へ下るを見て、
 更に二二へ香を打ち全く詰め終るの秘策とす

二の目日五廿
 圖五第



金銀銀桂歩

(説明) 四銀全銀五金三王四金二王三桂全歩三銀二王三金三王三金全王四歩三王二銀打二王一銀ナル全

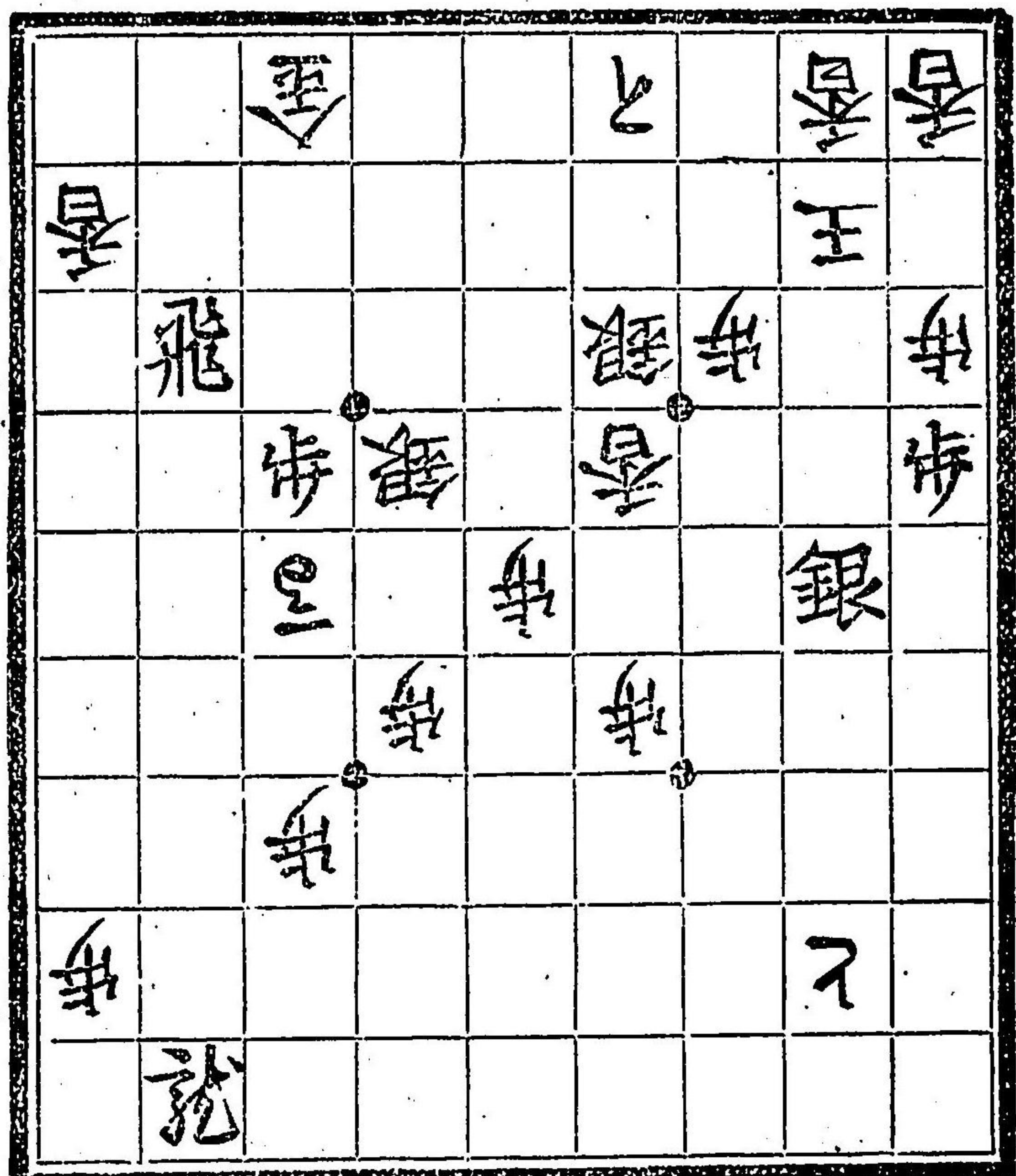
王二歩全王三歩ナル全王九香三王二銀二王二銀二王三香ナル全王三金三王五桂三王三金

四二より銀を打掛け王手を爲すは、三一の敵銀を四二に上らせ五二金を打ち次第に敵王を攻むるの、立脚を造る爲めに外ならず

二二に敵王の居る時、三一銀を打ちて玉手を爲さんか、是れ未だ順序の宜しきを得たるものと謂ふ可らず、仍て三四桂と飛て王手を爲し次に銀を三一に打ちて以て漸次に二四歩と突き、三六桂の睨みを活用せんと欲するの手段と爲す、是れ豈に良き老手段と謂つ可し二四歩と突かれて敵王一二に寄りしを見て二二より銀を打ち王手を爲し、敵王二二へ下ると其銀は又一一に行きて香を奪ひつ、王手を爲すは、漸次に二四の歩を二三に行きて敵王に拂はせ、次に二九より兼て奪ひし香を使ふの豫備と爲すものとす

三の目日五廿

圖六第



角

(説明)

八飛三桂三角三王三飛全王四と三王五桂二王三歩ナル

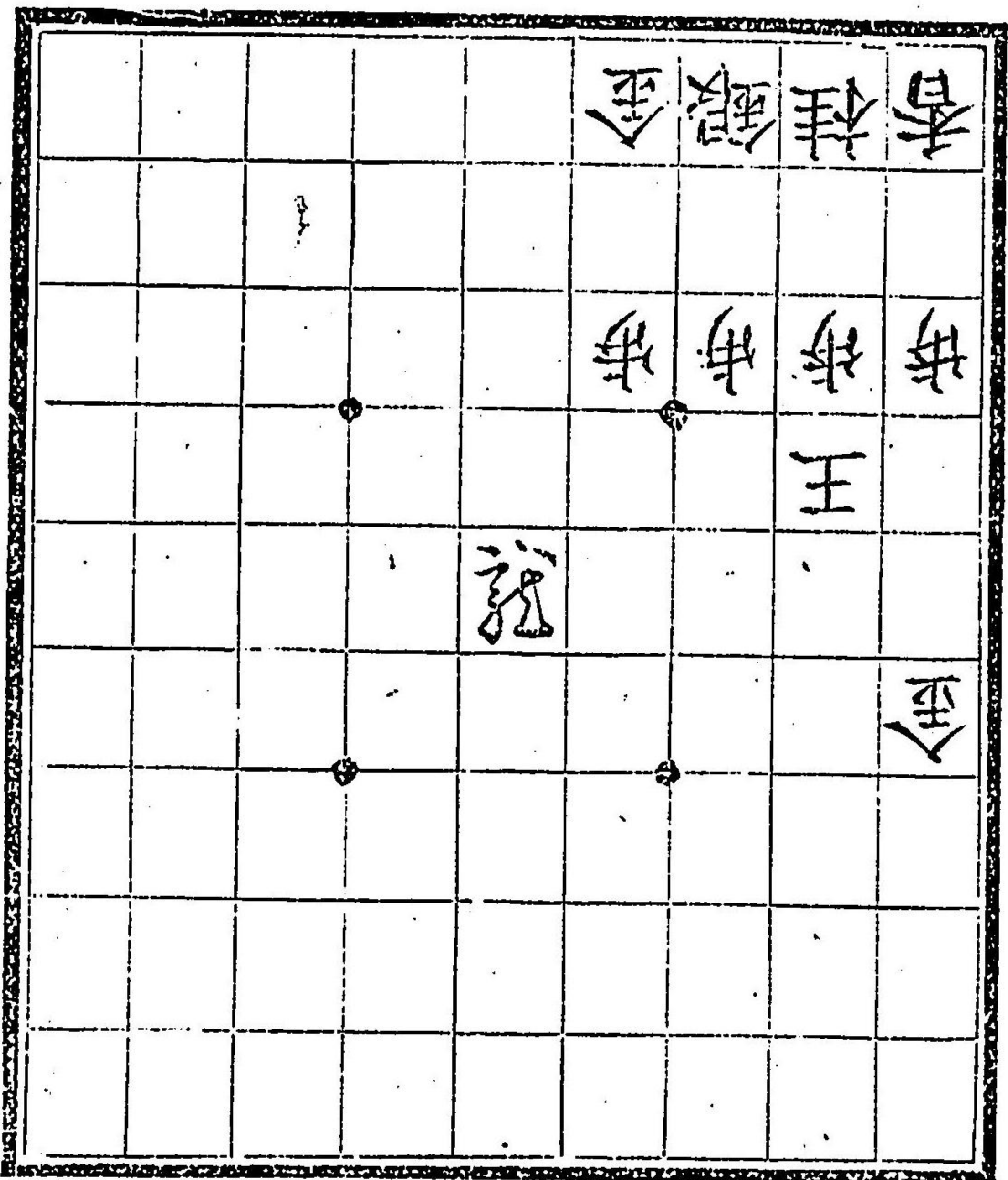
此詰手一經地に三一八角を打ちて王手せんか、詰手方に於て手を透すの掛念あり之を以て先つ八三飛を八二に突きて王手を爲し、徐ろに王を詰むべき地盤を作るは、是れ最も妙手と謂つ可し

斯くて八二の龍を以て三三の桂を拂ひ去る所以のものは、四一のとト將た角どの働さを緊切にせんことを欲すればなり

三五より桂を打ちて王手を爲すと、又一五より桂を打ちて王手を爲すと、幾許の違ひあるかと難ずる人もなきに非ざるべけれども、此駒立の場合に一五桂は本法に非ざるを如何せん、是れ三五に桂を打ちて王手を爲し王を一二へ退けて二三歩成り、詰め終らざるべからざるものとす

廿六日目の一

第七圖



飛角

(説明) 一飛全歩四角五桂間全龍三王三龍二王一步打全桂全角全玉五桂二王四桂打全歩三龍二王三龍
 二銀上三桂三王四桂全王三龍二歩間五二金打三王四金二王三金二王二金全王三銀打三王三銀
 詰方に於て、飛車を一四に打ちて以て一三の歩に取らしむる所以は、敵王を自領に入らしめんか爲めなり、若し或は然らずして飛車を六四又は二五の邊より打つとせば、自然詰方の手後れにならざるを得せ、故に此邊は深く初心の人の考ふ可き處なりとす

次に四六より角を打ち五五の龍を三五に向けるは、敵王をして愈々自領へ入らざるを得せらしむるの手段にして、次に四六角を以て一三の桂を取るは、後ちに至りて敵の備ひを打破る用意の駒と爲さんと欲するにあり

敵の備ひ全く破れ終り、二三より銀を打つは敵王を一三へ上らせんか爲めにして、而も二三銀を二二へ突かす、三二へ突きて明き王手を爲すか如きは、深謀遠慮の妙手と謂つ可し

二の目日六廿
 圖八第

		銀	王	香	桂		
		銀		香	桂		
		香		香	桂		
		角	香	桂			
	桂						

ト持駒

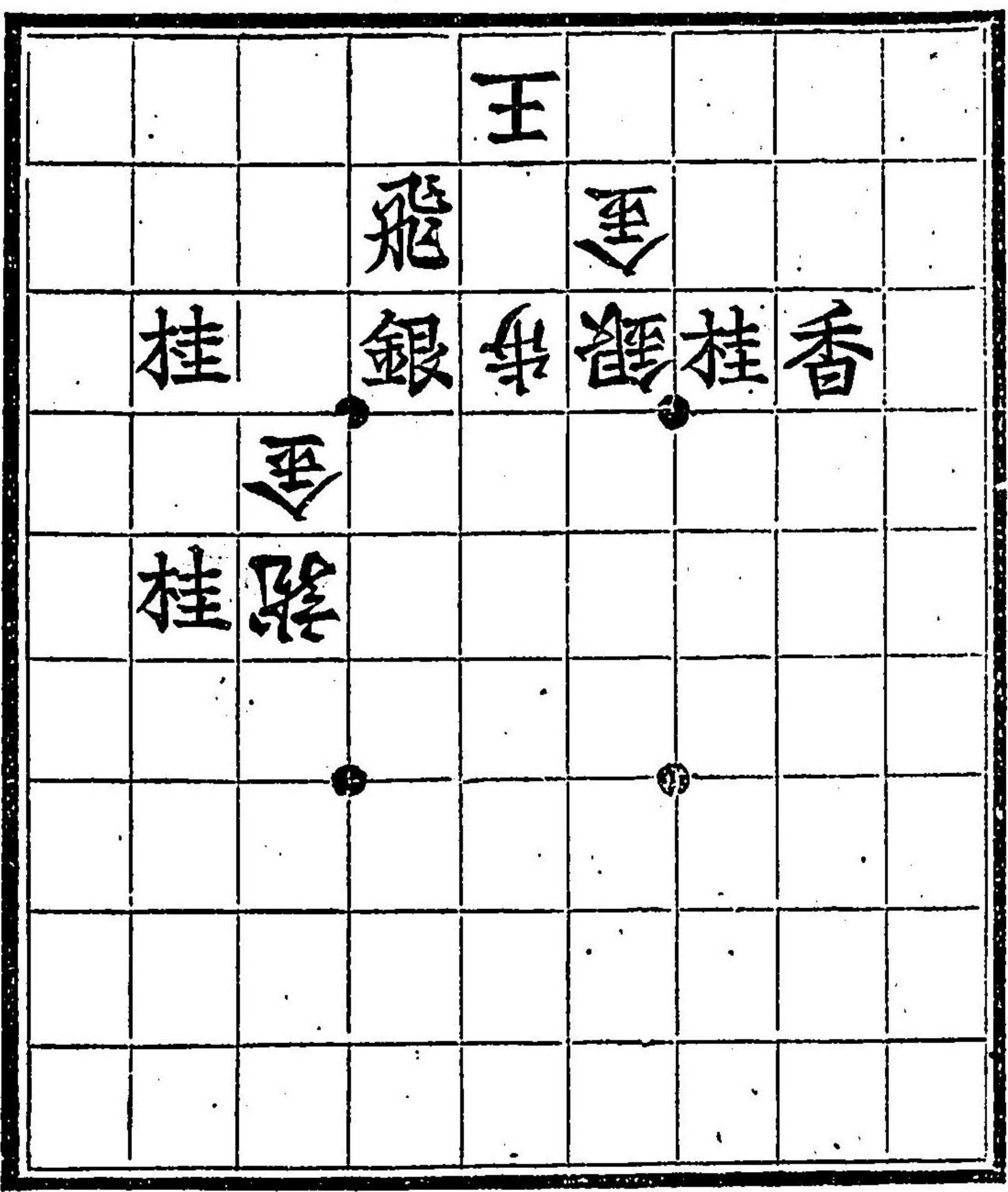
(説明) 一香ナル全 王七桂五王二香四王三銀左四王四香

此詰手先づ初めに六四の香を六一に突き付け成りて王手を爲すは、八五の桂を七三に飛せ
て王手を爲さんと欲するにあり、否な管に六一香に引續き王手を爲すのみの手段にあらす
して七三桂を行けば、則ち王手をなすと共に敵香を手に入る、を得べきに依り、此香は後
ち敵王が五一に避け寄りし時に五二に打つの用に充て得らる、勘定なり、其考ひの周密な
ること以て見る可きのみ

敵王の四二に上るや二二の銀を三一に突き王手を成す時は、敵王は必ず四三に上るより外
に道なし、仍て四四香を打ちて詰了はるに至る

熟ら此詰手の始終を見るに其二手目七三桂は六五の桂を以て行くと八五の桂を以て行くと
の二ツは始終の詰手に取りて大いなる得失あり、又七三桂の爲めに敵王五一に寄りたる時
に五二香と打つと、四一角を行き成りて六三より香を打つとの利害あれば、此邊は最も能
く初心の者の考ふ可き所なりとす

三の目日六廿
圖九第



桂角

(説明) 四飛全王五角全王一金一王三桂打全金全桂全龍一金

六二の飛車を以て四二の金を拂ひ取るは、五一角と打ち後四一金を打んと欲するにあり、抑も五一に角を打つは三三桂の働さを充分ならしめんとするの手段にして、最も好き手なりとす

敵王六一に寄りし時に當り、七三に桂を打ち王手を爲すは七四に居る敵の金を奪ひ去りて、後らに使ふ駒に充んと欲すればなり、蓋し此手は深き考ひを以てするに非ざれば、按じ出し難き妙手と云ふべし

既に詰方の手に金入れり、之を打ち王手を爲すには七一よりせんか、敵に於ては飛車の拂ひあり、故に此れは好き手なりと云ふを得ず、况んや六二、五二に金を打つ事に於てをや、其凡手なること言はずして知る可きのみ、仍て五一金と打ちて王を詰るものなり

廿七日目の壹

第十拾圖



金金

(説明) 八歩ナル七 二金三金八金全 王四金七王八金六王七馬全 王四桂六王二飛打全 王三金六王七金

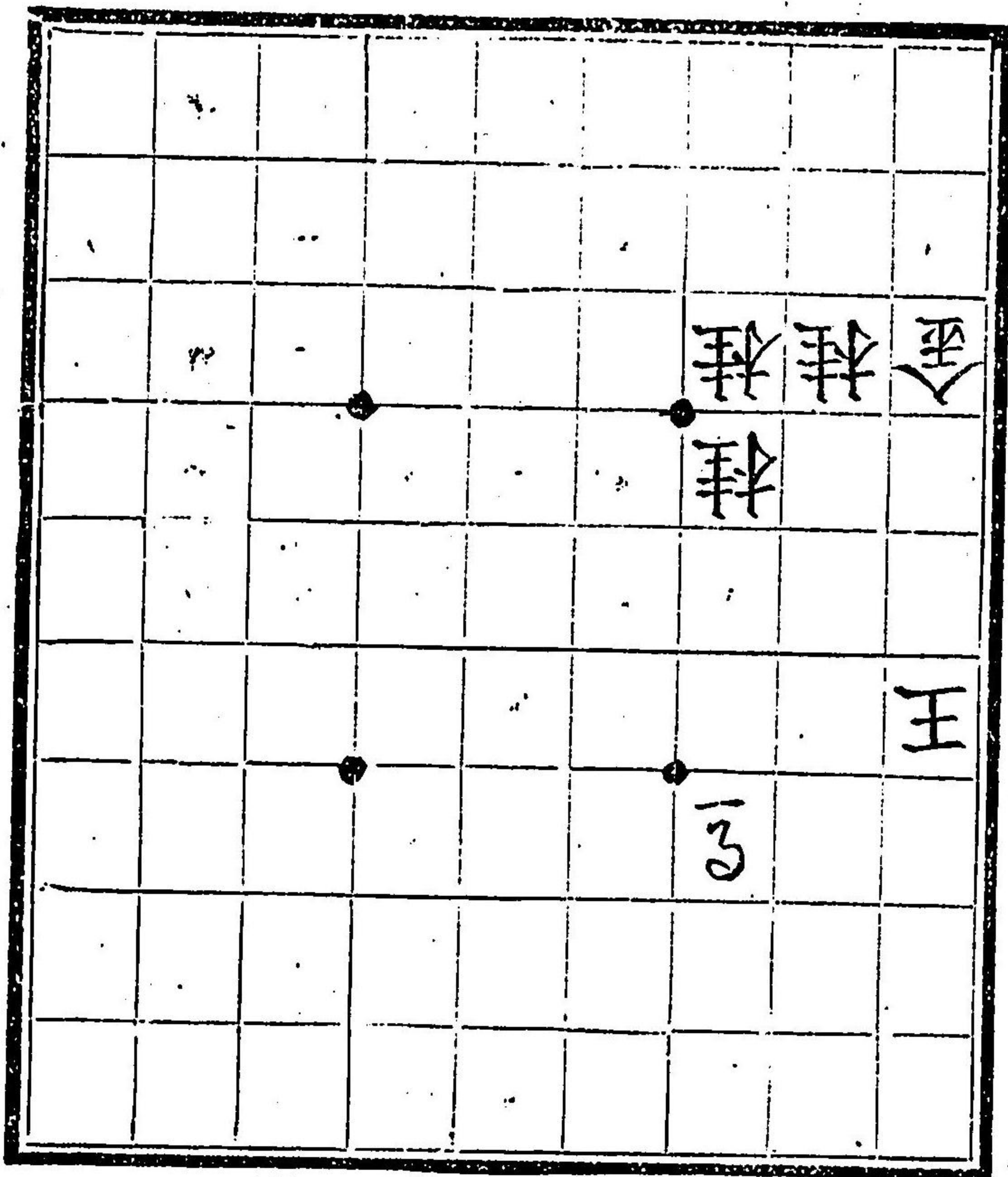
(變化) 四金ノ時七王不行九 四王此時七 二馬八王九馬七 六金全飛八馬七 六馬七王六馬七 八飛打

初め八一步と突くは七二の飛車にて明き王手を爲すの意にて、又八三金と打ち九四金と打ち八四金と寄るば、敵玉を六二へ寄せざるの計略とす

此の如くして四五に睨み居る馬を以て、七二の金を奪ひ七六の桂を以て六四の飛車を取りつ、王手を爲す所以のものは、皆な是れ後ちに至りて其奪ひ取りし駒を大に利用せんと欲するの準備に充つるものなり

次に六二より飛車を打つは、王手を緊切にする意にて茲に至りては敵王下りて其飛車を拂ふより外に手段なければ、即ち賺さず七三に金を打ち又七二に金を打ち詰め切るものなり

二の目日七廿
圖壹拾第



及手二十九 時桂金金

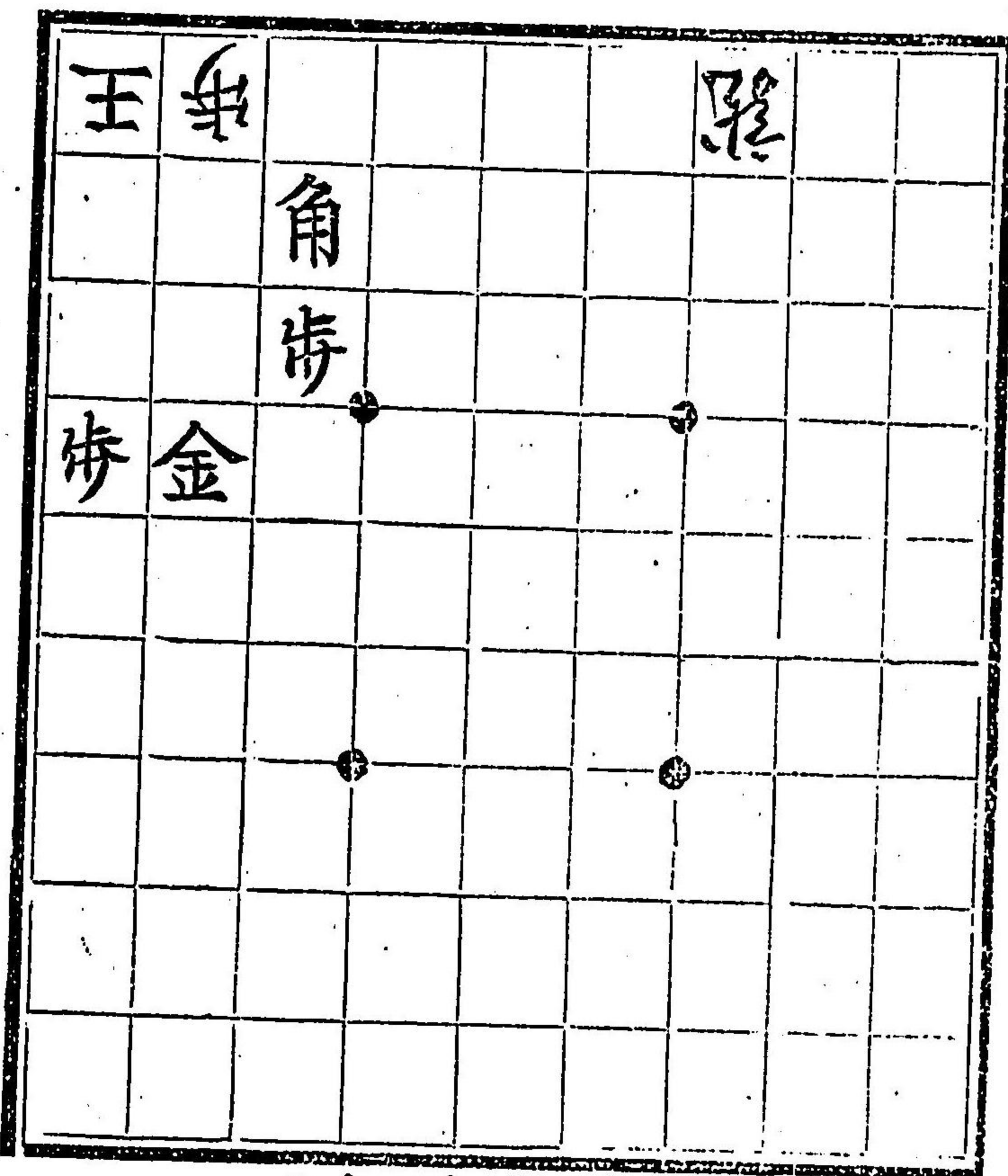
(説明) 八桂打八王九金打全桂七馬六王九金全金九桂七王六馬八王七金九王八歩打全王八桂九王八金
 全王八馬九王七馬八金間八桂九王八桂ナル全金九馬以上廿九

先づ八二に桂を打ち次に九五に金を打つは、八七の桂を九五に上げ詰手方の邪魔物を除か
 んが爲めの策なりとす

七四角と上りて八五の王を八六に退かせ、九四桂と飛て八六の玉を八七に退かせ七四の馬
 を以て九六金を取りつ、王手を爲すは、王を八八に下らせ九六の所にて取りし金を、七八
 より使はんが爲めの考ひなり

九九王の時に九八歩と打ちて之を取らしむるは、八六桂と飛て玉手を爲し再ひ九九王の時
 に八九金と突きて之を敵に與ひ、七八馬と行きて三たび王を九九に入れ七七馬と引きて桂
 を拂ひつ、王手を爲し、而して其桂を八七より打込むの手段を施すは其考ひの深さを見る
 に至れり、且夫れ七二桂成りて王先きの金を七二に寄せ七七の馬を九九に入れて詰め終
 る、其手段の巧みなるに至りては實に一手萬金の價ありと謂ふも、敢て過言にあらざるな
 り

三の目日七廿
 圖貳拾第



飛歩歩
 十九手
 及詰

(説明) 九飛打全 王九歩 ナル九王九と全 王八角 ナラス八 二王七角 ナル九王九歩 打全 王八金九一王八馬全歩九
 歩一王七歩 ナル

九二に飛を打つは九四の歩を九三に突き成らしめ、又之を九二に突き成らしめ、成り九一に王
 づ八三み角を引んが爲めとす、尤も其角を成らざるに引く所以は七二に出で、成り九一に王
 の入りし時に、九二歩を打ちて王を上らせ八四の金を八三に突き王手せんが爲めの伏線に
 外ならず、抑も此考ひたる初心の者の能く按じ出し得べき所にあらずして、老練の將棋家
 にして始めて能く此考ひの起るべきものと謂わん乎

然り而して七二の馬を八二へ寄せ八一の歩を上げて其馬を取らしむるものは、即ち九九の
 王を八一に寄せるの計略とす見る可し、九二に歩を打つ時は九九の王自から八一に寄り七
 三の歩七二に突き成りて、王全く詰め切らる、ことを詰將棋を學ばんと欲する者、此れ等
 の定跡を手本として研鑽することあらば、詰手の秘訣を知り得るに至る可きのみ

廿七日目の四
 第拾三圖

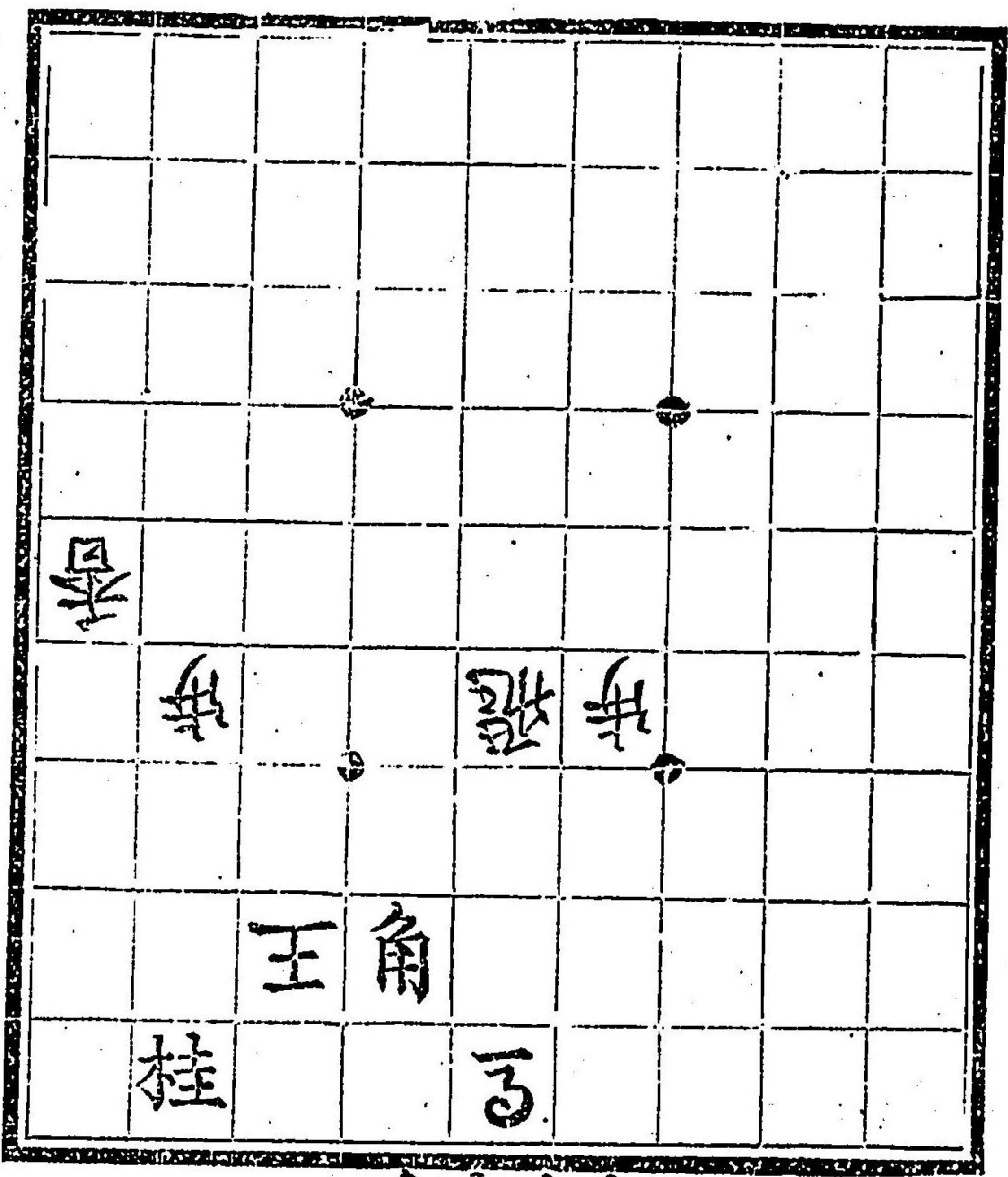


桂のフナ
 手段

(説明) 四飛ナル二王二角全王三歩ナラメニ王二歩全王四桂二王三桂全香二歩全王三龍一と二龍四王五銀一五銀全王五龍七王八歩全金全金全王九銀七王八銀一王七龍九王七銀九王八龍九王四龍先づ剪頭に四七の飛車を四三に弱き附けて王手を此すを以て、自から遂に敵王の護衛を爲し居るもの皆な崩し去らるゝに至らざるを得ず、即ち一二角と引きて敵歩を取り三三桂を打ちて三一に睨み居る香を上るが如きは是れ決して平凡の手にあらずして最も巧みなる手段と謂つ可し

三二の龍の時に一二の王二三に上り二龍を寄せ附られて、又王一四に上る仍て三六の銀を以て二二の敵歩を取るものは、抑も亦た二二に在る龍の道を一條に疏通せんが爲め考ひより出づるものなり
殊に夫れ二五銀を一六に引き、王を全く一八に入れて二九より銀を打ち王一七に上るに付き二八銀と突き、次て二二の龍を二七に引き以て一七の王を追々に二九三九四九等に廻らせて、詰め切るが如きは何等の靈腕老手ぞや、實に敵服の外なき也

廿八日目の一
第拾四圖



金金金金

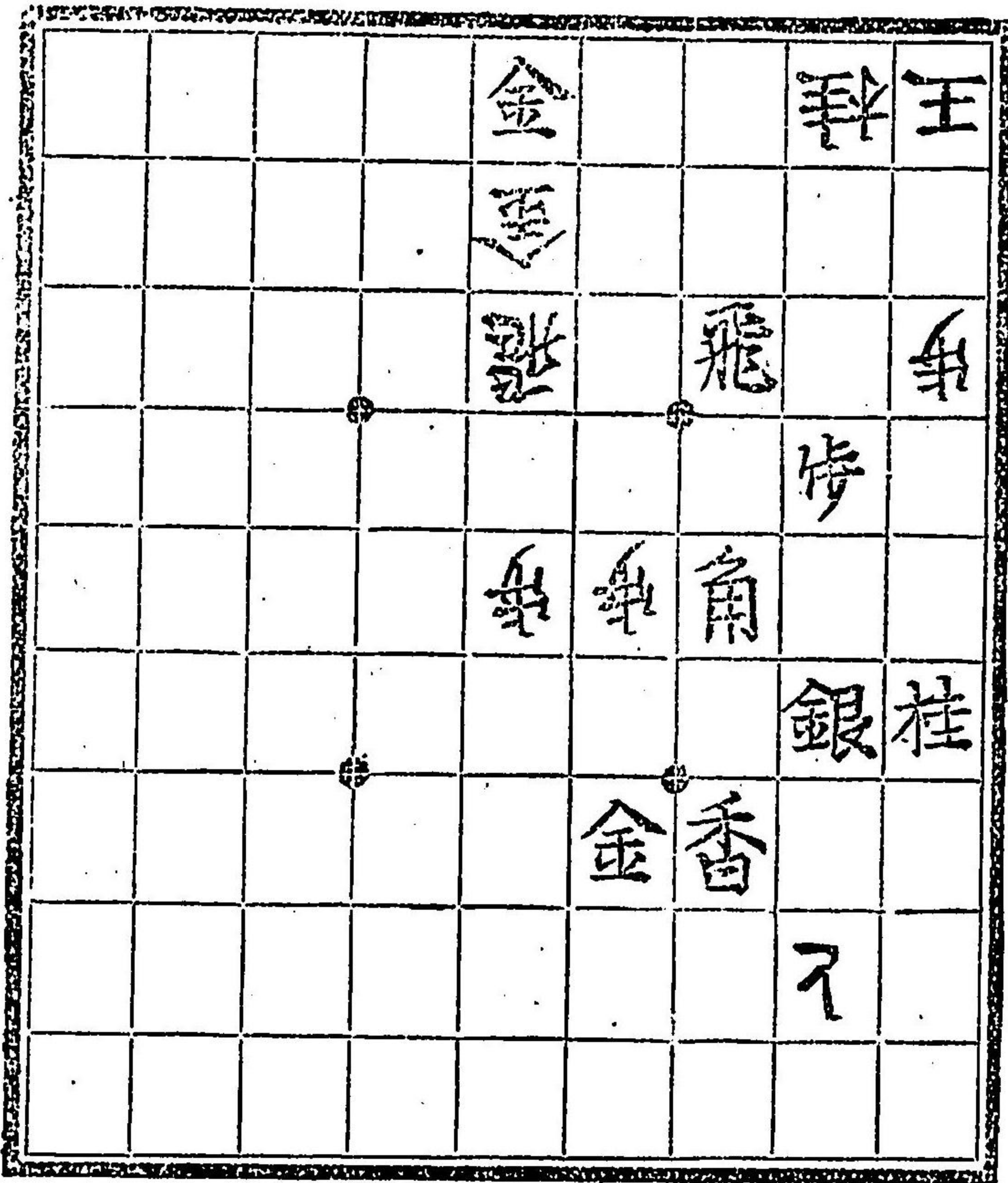
将身猿自新法

廿八日目の一

九九

(説明) 七金八王九角九金全王八角全王七金引全王八金七王七金七王八金
 此駒立詰手は、別に深き考ひを要せざるが如くにして其實は大に然らざるものあり、喩へ
 は初め七七へ金を打つ手の如きは一旦敵王をして九九へ入らしめ、此れより更に六七、
 五七等へ引出し詰め了はるの準備にして、豫め其用意の深密なるに至りては、凡人の能く
 企て及ばざる處なりとす
 且夫れ六八の角を七九に引き、九九金を打ちて之を敵に興ひ、八八角と上りて之を遣り七
 八金と引きて之をも渡し、更に八八七七に金を續き打ちて敵王を五七に寄せるの手段に至
 りては、最も上乘のものと謂はざるを得ず

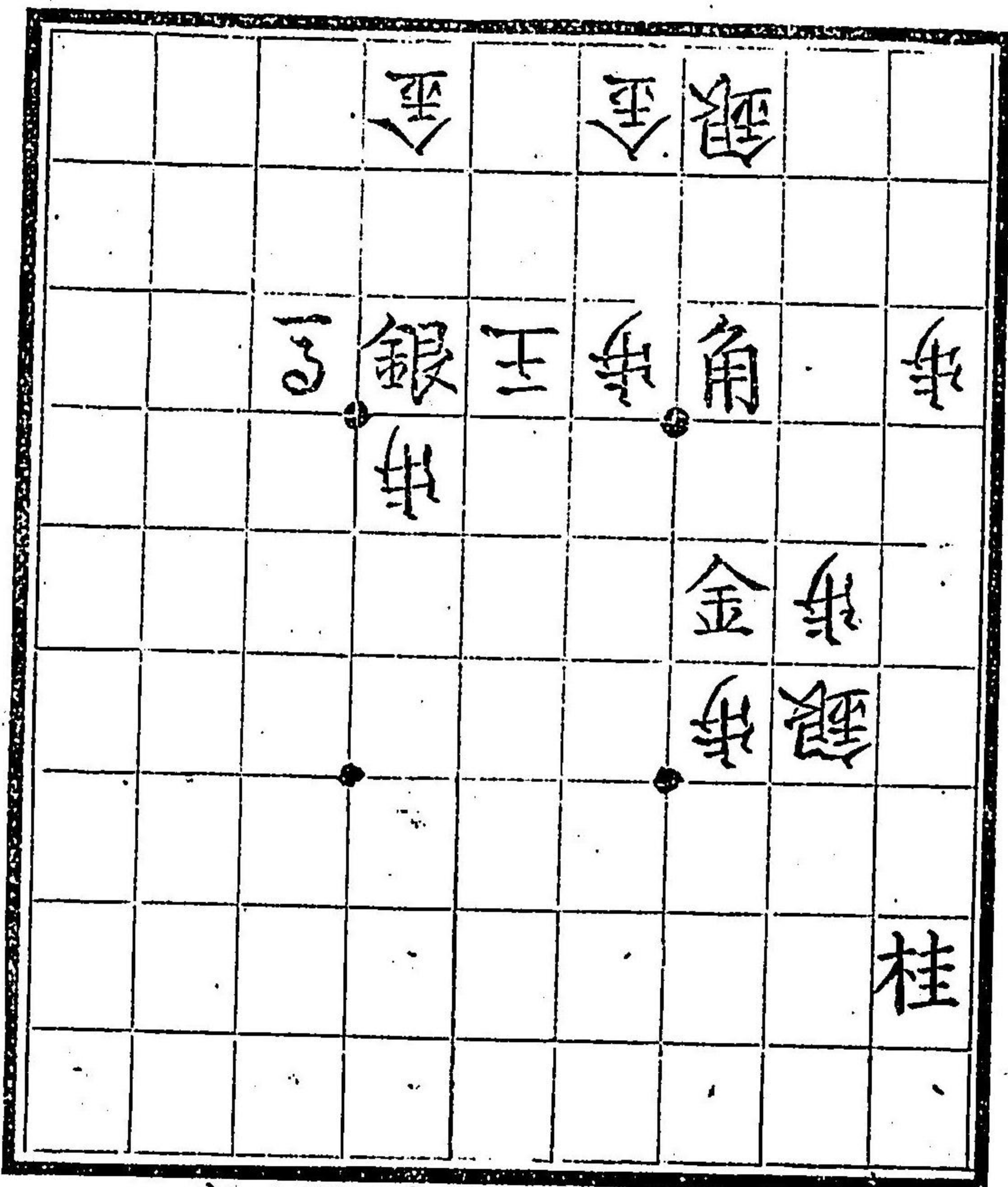
廿八日目の二
 第五拾圖



侍
 の手段

(説明) 一歩全王三歩一王二と全王三角ナラズ一王二歩全王四桂一王三角ナル全王三飛ナル一王二龍二
 王五銀全王六金四三王五金三三王四金全王四龍三王四龍二王一金全王三龍
 初めに一二歩と打つは先づ詰手の立脚を造り出すの手段にして、此詰駒立にして安んぞ此
 一二歩の手なさを得んや、後ち一三角と行きて其角成らざるが如きは後計の深甚なる所な
 り、能く心を留めて之を考ひ看よ
 三三の飛車三二にて成り、又一二へ廻るは三七、四七に居る香、金の働さを爲さしめんと
 欲してなり、故に二五銀と捨て直ちに三五金四四金と敵王を押込め行き、次に三四に龍を
 廻して以て切迫の王手を爲すが如きは、初心の者の思ひ當らざる所なり
 殊に況んや敵王の四二へ下りたるを視て、四一金と敵に取らしめて三四の龍を三一に向け
 以て敵王を詰め了はる手の如きに於てをや、此れ等の手は實に一考千金の價わりと謂ふ可
 きなり

三の目日八廿
 圖六拾第



桂桂 歩桂桂
 王方 飛方

(説明) 六桂全歩四桂全飛 ナラズ五銀全王四銀全王五馬三王三歩全王四飛三王六桂全歩三銀全王二飛
 三王二飛全王一角三王三馬

此詰手初め六五より桂を打つは七三馬の利きを附けんが爲めにして、又四五に桂を打つは四五銀二六桂等を後ちに至りて、大に働かしめんと欲するの備ひをするものなり
 五五馬と引きし時に敵王三四へ退く、仍て三五に歩を打ちて敵王に取らしめ四五より飛車を打ちて再び敵王を三四へ退かせ一八の桂を二六へ上りて敵の銀を奪ひつ、王手を爲し、更に其奪ひたる銀を二三より打ちて王手を爲す、其利用の機敏こと驚嘆す可きのみ
 敵王二三の銀を取るに付き、二五飛と行き以て敵王を三二へ避けしめ、次に二一龍と指して之を敵王に取らしむるは、即ち三三角と五五角と相俟ち相顧りて以て敵王を窘むるの妙手なり

廿九日目の一
 第拾七圖
 廿九日目の一

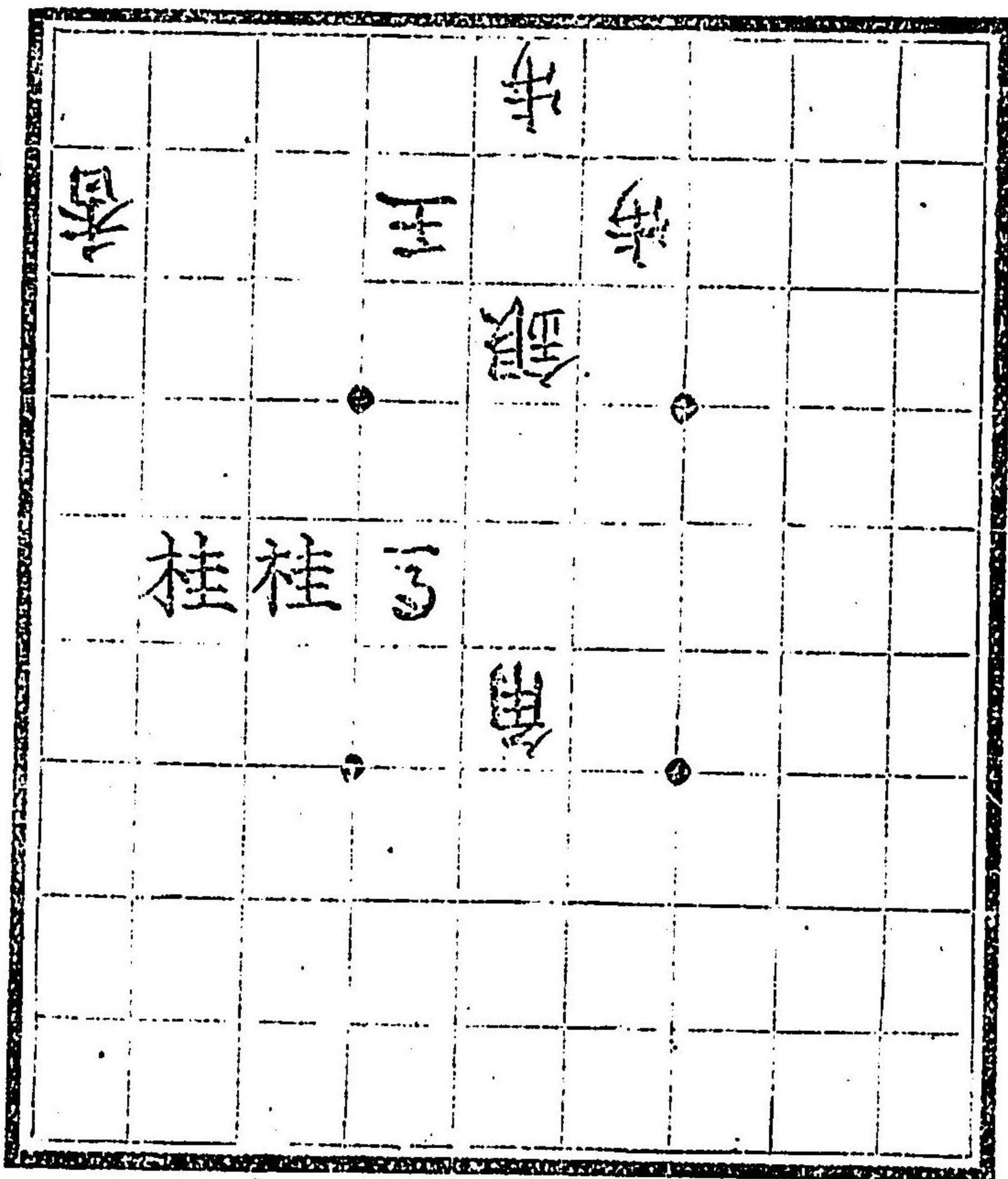
銀			王						
		飛	角	王					
王				銀					
角	銀	銀	銀						
	入								
皇									

金銀銀銀香

(説明) 八角全王九金全王九香全と八飛全王七角全王七銀打八王三銀打七王二銀打六王七銀中七王八銀下

均しく詰手にして其詰方の機敏せざる可らざるものと、將た緩漫せざる可らざるものとの二種あるを以て、詰將棋を學ぶ者は特に此事を知らずんばある可らず、而して此詰手の如きは初めより五手目の七一角までは、實に其迂遠き手のみなるが如きに似たれども、又此駒立にして最初迂遠き手を指ざるを得ざるは、是れ誠に止むことを得ざる次第なり其半ばに至り舞々銀を打ちて王を攻め立るに至り、前の迂遠き手のみを指したる事を顧みて思ひ合すれば驟然として大に能く悟る所ある可し、之を要するに詰將棋は最も詰手に緩急其宜きを得る處なくんばある可らざる、即ち緩漫すべき處は緩漫して機敏すべき處は機敏すること太た肝要なるものとす、初心の人乞ふ深く考ふ處われ

廿九日目の二
第拾八圖



銀桂桂桂詰方

(説明)

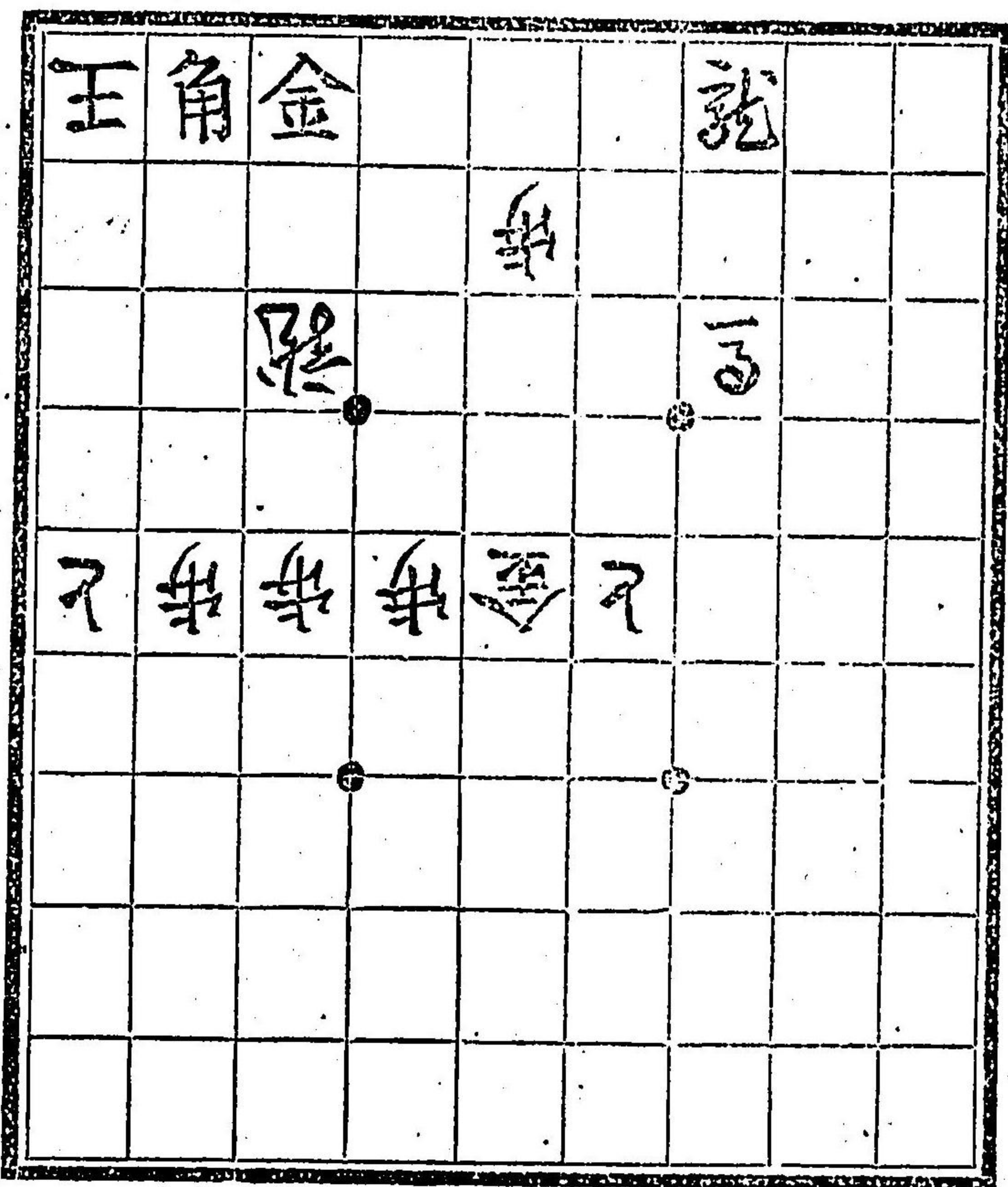
七桂六王三銀全 王五馬全 銀六桂八王七桂九王八桂

七四桂を打ちて王手を爲すは、敵王を先づ六一に退かせ漸次に九一へ追ひ入らしむるの手にして、唯だ一時の咎め手にはあらず最も意味深長の手と云ふて可ならんのみ

夫れより七二に銀を打ち五四馬と突き五三の銀を五四に上らしむるは、六四に桂を打つに障りなからしむる爲めの手段にして、此手段を施すにあらずんば決して能く此駒立を詰め得べからざるなり

既にして敵王は八一に下りしを見て八五も桂を七三に飛せて王手を爲す、此ふ於てか敵王は自から九一に寄らざるを得ざるが故に、又七五の桂を八三に飛せて王手を爲し以て全く詰込み終るに至る

廿九日目之三
第九拾圖



香香香香

(説明) 九香 全龍五馬全と九香 全龍全角全 王八金 全 王七金 全 王七香 六王四香

(變化) 七香ノ處三王九飛

九三より香を打ちて王手を爲すは、結局七三に睨み居る敵の龍を早く片附けたはんと欲するの手にして、次に五五馬と引くは少しく大早計に過ぐるに似たれども、九二香を打ちて敵の龍と我角と替りし場合には、必ず八二に打つべき金の入用なるに付き、斯く手早く五角と引きて金を取り入れ兼て王手を爲す所以なれば、其考ひの周到なるは誠に凡人の意表に出づるものと云ふべし

後ち八二金と打ち、又七一金と七二に引き之を敵王に取らしめる所以は、次に七四、六四等より香を駢べ打たんと欲するの備ひを爲すものなり

敵王六二に寄りし時、六四より香を打たれしに付き五三へ上らんか詰方は、三三より持居る所の飛車を打ち三一龍と勢力を合せて、鋭く敵王に當るを如何せん

廿九日目の四 第貳拾圖

皇	歩	歩	馬	馬		馬	馬	
王		龍	歩			歩		銀
	歩					不	桂	
歩	香		龍		金			
	不	銀						
							歩	
		桂		不	香	飛		歩
			馬					
			香					不
								百

銀

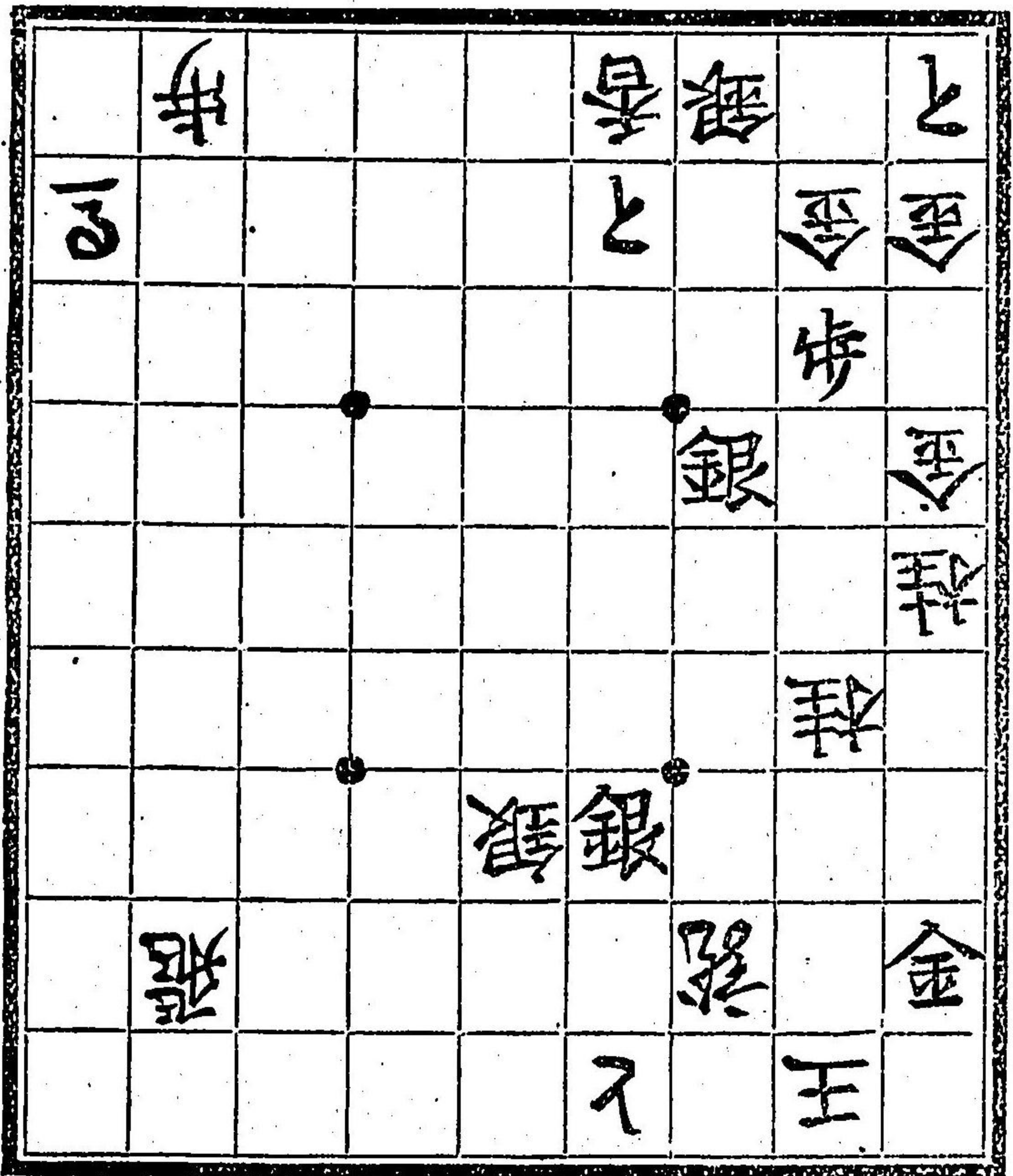
(説明) 八歩ナル全歩九銀全王七龍全銀八桂九王九歩一八王三桂ナラス七二王八銀三王三飛ナル全歩八香全と八角三王七歩九と四歩三王六歩八歩ナル五王四金一王三桂ナル全王三金全王三金三王二銀ナル全王二金打

八二に歩成り九三に銀と打ち七三に龍を突き出す所以は、敵王を漸次に六三五二等へ廻らしめんが爲めにして、蓋し此の如き手段を用ふるに非ざれば、定法の請方を見る能はざるに由ればなり

殊に三三龍を與へて六八香と行き一八馬を以て王手を爲す處、眞に敵王を惱まし弄ぶの手段巧みなりと謂つ可し

其敵王の五二へ来るや四三金三一桂成り三二金を打つの手は痛切にして最も巧みなり、之を要するに此請手定跡は請手数多くして且つ戦線殊に廣きに涉り將た請手能く順序立ち、與奪も亦た能く勘定立ちて、毫も其手抜けたる跡あるを見せ、請將基の手本としては是れ最上乘のものと言ふべしなり

一の目日十三
圖一廿第



角香歩

(説明) 三銀一王一香 打全 王八角 打全 歩九飛 打一王八馬七歩 アイ一歩 打一七王七馬全桂全飛六王八桂 打一
 王七飛四王四飛全 王五金 打三王二と全 王二歩 ナル 全銀全 王四歩 打三王四金 打二王三と一王二銀 打二
 王二歩 ナル全 王三金二王一銀 ナル 三王二金全 王二と三王二金

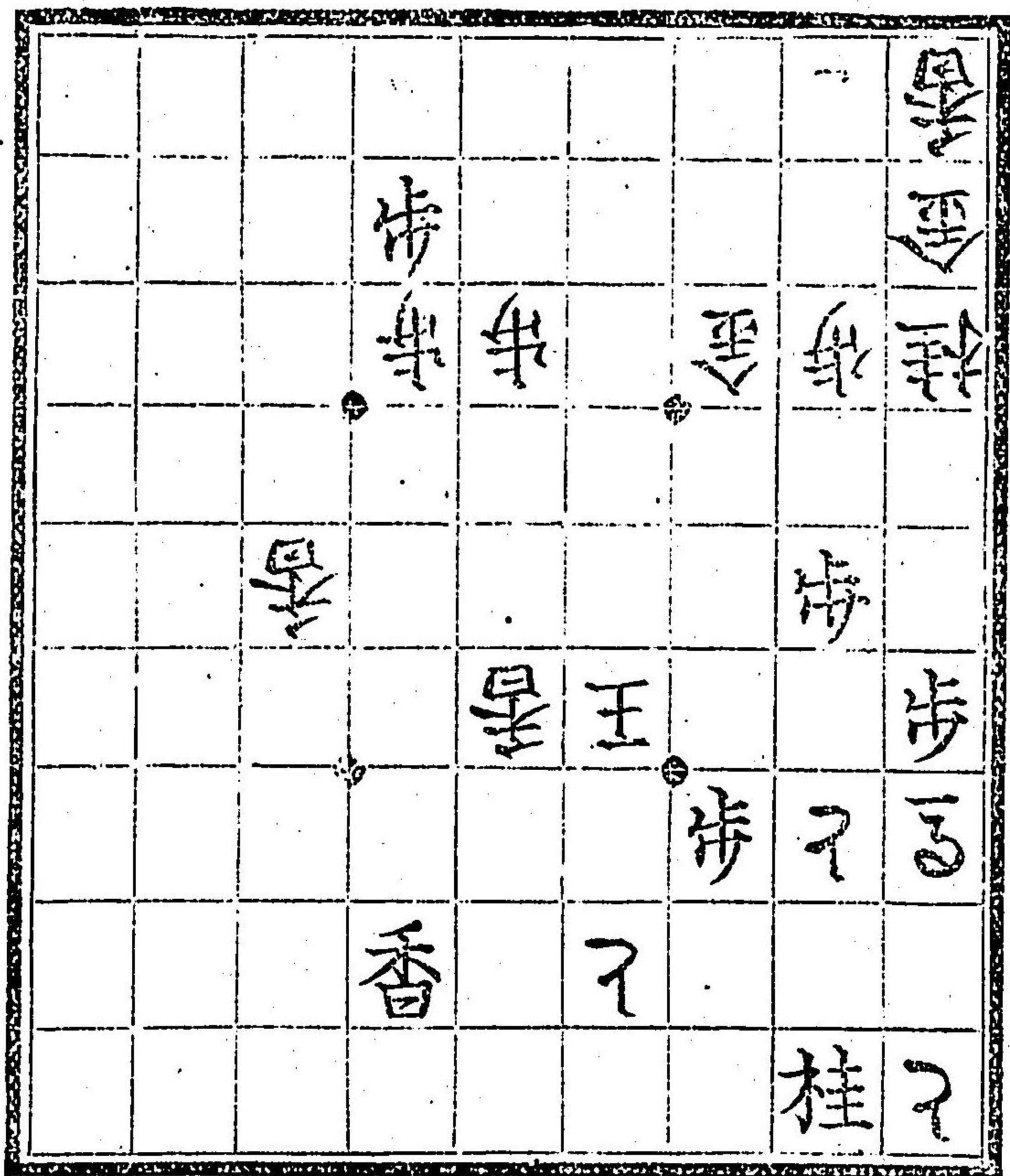
此詰手の三手目八二より角を打ちて王手を爲すは實に拙き手なるが如くに思はるれども、
 其實は後に至りて八一馬と廻るの豫備を爲すものなれば誠に考ひの深き處より出しものな
 り、殊に夫れ二九飛二七馬二八桂一七飛等の手を以て次第に敵王を二三二二等へ追ひ詰め
 るの手は、太だ妙手と謂はざるを得ず

又二二王の時に三二とト寄り二二銀を打ち二二歩成り三三金と指し一一銀成り一二金と指
 す手は、順次に敵王を詰め込むの策にして、詰手の最も老練なる者にあらざれば、決して
 能く爲し得ざる所の手段なりとす

若し夫れ世の詰將棋を學ぶ者にして打駒の利害、捨駒の得失、詰方の順序等を考ふるの資
 けと爲すには、此定跡を深く考ひ合すべし

三十三日目之二
 第三十二圖

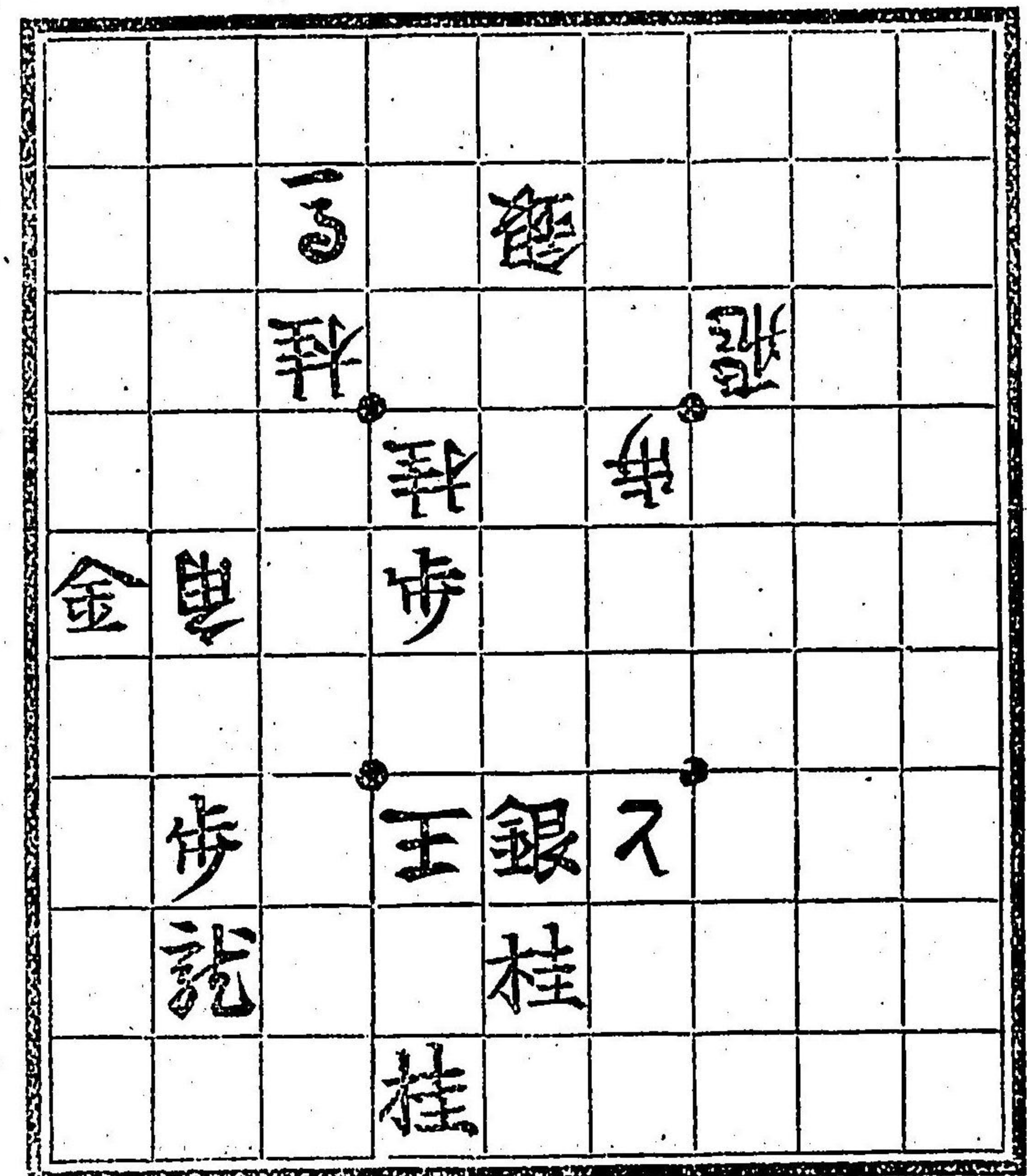
此れより以下に掲ぐる
 四圖の詰手ハ伊藤宗
 印翁の按出されたる
 ものに係る若し夫れ
 之を詰め得るに至ら
 ば儘に初段の伎倆を
 具するに至るべき旨
 翁自ら之を言へり故
 に便宜に依り茲に之
 を抄出する事とせり



飛飛角銀歩

三の目日十三

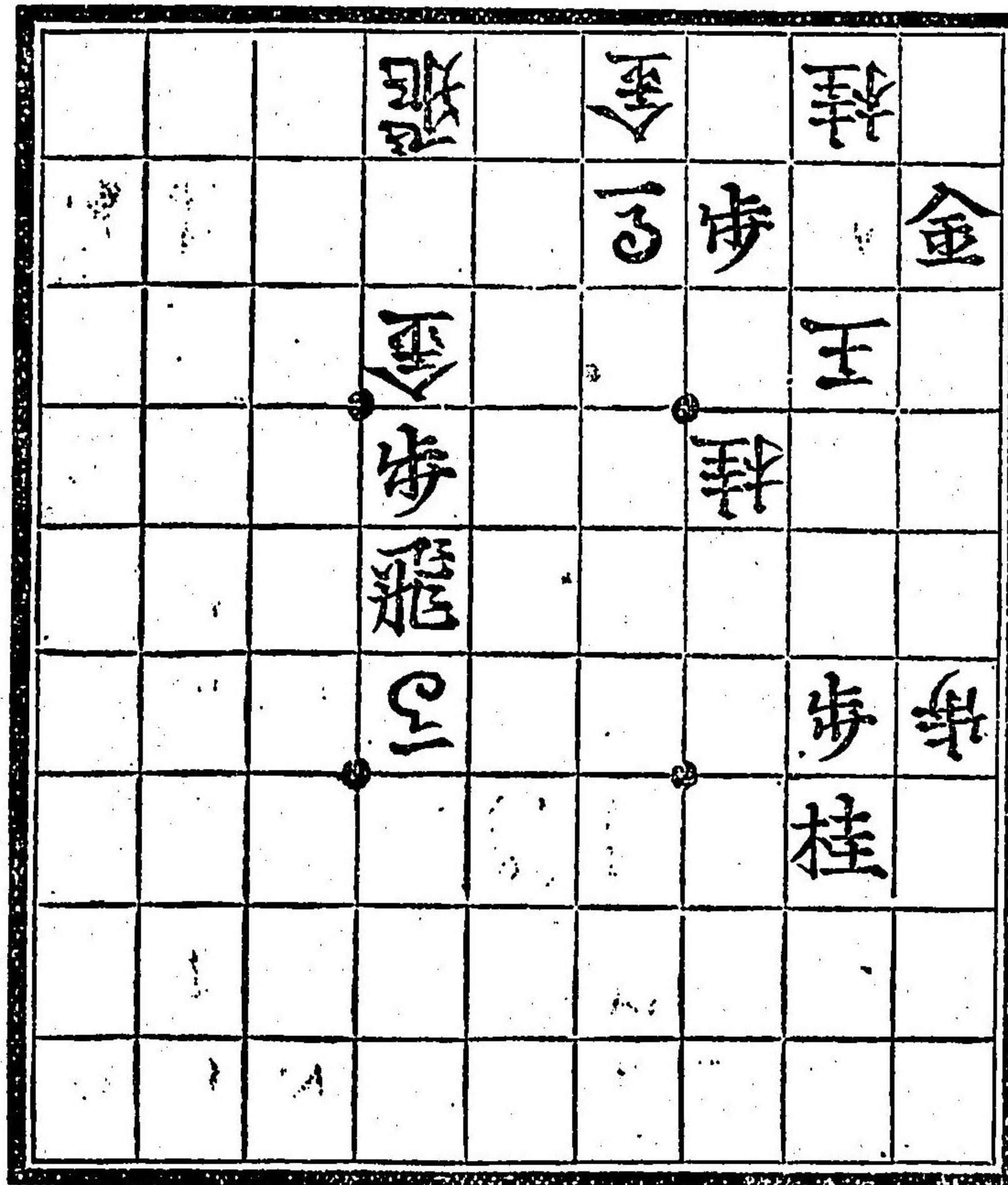
圖參廿第



持駒あり

四の目日十三

圖四廿第



金歩

十三日目五

【第五廿五圖】

	王	銀	馬			飛
香				馬		
飛		馬				
	馬		銀	桂		
		銀	桂		歩	
歩						
又	歩					
		又		桂		
		桂	歩			

持駒はなし

○第十一章 將棋格言

○金銀歩の頭に上るべからず○桂早き時は損になる○左香落に三六の歩を突く可らず○角落に四五の歩乗りかけ宜しからず○平手の將棋に四三三へ銀上れば勝負分る○手の無き時は端の歩を突け○三五七五の歩に手あり○歩の無き將棋は負け將棋○銀は千鳥に使ふがよし○金は横直に使ふがよし○桂先きの銀定跡なり○金銀八九に打つは大切○歩突きの桂は剝ぬものなり○飛車は敵地に打て利あり○成り角は引て遣へ○歩二ツより大切に遣へ○八八、二二、四六などへ香車を打つは命と釣り替へ○なまの香車の歩あしらい○飛角の捨場は大事なり○敵の歩数は勘定すべし○王の開きに極意勝ちなり○王は深く構ふべからず○仕かけて構ひ出来る事あり○無縁の歩も心して取れ○危く指て王の援け廣さを名人と云ふ○桂間の王手に合間なし○桂馬の高上り歩の餌食○角上り不詮義は負け○桂は取られて利あるも守つて損あり○上手の將棋は金を王の近さに置く○先手の受先きに心せば勝つ○後手袖飛車の時は早く角を引け○桂馬三枚持てば下手も勝つ○後手は王と屈ろぎて六ツテ敷○上手は仕掛を待つ者なり○銀を先きにして金を後へに使ふことよし○敵の歩切を考ふ

べし○香持ちたる方より王筋立ること○歩の間は考ひよ○駒の離れには秘訣ありと知れ○
 桂を興ふること口傳あり○王手を早くするは善き事なし○龍王敵地にて遣ふこと大事○龍
 馬手前にて遣ふことよし○王は早く構ふべし○王の脇金銀離るべからせ○王角の筋用捨す
 べし○金は進むこと早く退くこと遅し○桂の飛見合せ肝要なり遅き時は勝少なく早き時は
 損となるべし○駒打込みて取らぬと考ふべし○王の逃置きに能き手あり○端歩を突くは手
 後の基○駒を手に持ちては働き格別なり歩は勿論と心得よ○敵の歩は考ひて取れ○香は
 普通の駒なれども端の仕掛腰要なり○五筋目と兩端には極意の手あり○進みつゝ其駒にて
 前を構ひつゝ仕掛るは上手の駒組と知れ○勝つ事を専らとするよりも守りを堅ふせよ守り
 堅ければ自から勝つべし○將棋の極意は早く後の變を知りて駒を組替るにあり○名人は末
 の變を知るが故に駒組みなし○下手は早く破らるゝを以て定法に駒組みをせよ○同手は三
 度までに仕掛の方より替ふべきなり○駒騎ぶる時に貴人の方へ王を雙と心得よ○八二飛を
 打つは習ひあり○敵桂の頭に歩を打つは後に利あり○四間飛車の時四筋を突かず中を突く
 手定式なり○九七歩習ひの手なり○六四銀は敵を釣る時の手なり○三五歩突き捨てる手は

手過ぎて悪し○三四歩の時二六角を引くは習ひあり○上手一四金と端歩を取るも下手香に
 て其金を取らぬは稽古の手なり○五五銀と上手方が指せし時下手方四二金と受るは習ひあ
 り○八五歩突き捨てる時桂にて取るが定跡なり○二四歩と突く時五六歩突かずに飛車を出る
 こと宜しからず○七五歩の時取らぬに八五歩突くは定跡なり○飛落將棋は角道留めて指す
 こと定跡なり○三筋の駒組みに四六金上りの筋は一六歩と突く稽古の手なり○八五桂はね
 んどせば四二銀る本法なり○八五歩を突かぬ内に飛を八二へ廻すは負けなり○三々銀の時
 五五歩定跡なり○四六歩と指されし時櫓に組むは法にあらす○二六歩を突かんと思ふ矢先
 さへ三五歩を突かれし時は石田の意なり○先き手美濃通ひの時五四銀定跡なり○角替り五
 六に打つは法にあらす○角は五五へ戻る様に打つ本法なり○六七銀上り七八金と指さば袖
 飛車なり○敵王先さより攻め來らば高櫓にて受るが本法なり○七五桂打つ時同角取る手定
 式なり○飛車落には四八王本法なり○角落には七八より飛車を使ふ定跡なり○向四間の指
 手に角三三へ上るは法に叶はせ○飛車落に雁木の駒立は本法なり○飛香落の將棋に角替る
 こと定式に背けり○飛車落に向ふは四筋の手本法なり○上手三三へ指上らぬ時は四五に手

あり○角落將基は勝つ事なく又負ける事なし○相櫓は桂に手あり○袖飛に向ふには三々銀四々銀と受るを定式とす○左香落二六飛の時四六の歩定跡なり○三八飛の時三七角の手あるものなり○飛車落四五歩六四桂打つ時四四歩の指順にて四一角を打つ手あり○相掛りの時先手が四五の桂法にあらす○相掛りの手に一一角と四四桂打つとの替りあり○飛車にて横歩を取る可らず○飛車先き二つ突すに飛車二二へ廻るは負けなり○定跡に居王手なし○なま角はなり歩に劣る○桂先きの銀定跡なり○六五四五の歩突き越しの時五七五三に銀上るは破法○漱八八へ角引く時は此方二二へ角上るは定跡○四六突き越しの歩は取らぬものなり○五五角の時四六へ銀上るは本法なり○端歩兩方を突ぬが定跡なり○七五歩を突がさる時は六三金と上るは本法あり○一五歩突き捨るは二二に歩を打つ理あり○飛角落の將基は角の捨場大事なり○上手より飛先きに金銀を使ひ來らば下手は強く其飛先きを受べからず○角落方より五三銀と上らず三一角引く時六五銀と指すは是れ定跡なり○四筋飛車には四五歩と突て利あり○強き方より王先き急に突き來る時は六六歩と突きて高櫓に組むべし○五二銀打つ時六一角打つ口傳あり○上手三三桂を上らず外の手を指せば四五に手あり○

敵一四歩を突く時一六歩突きて受く可らき○二二角と引く時は六五歩と突く口傳あり○向四間裏の駒立は四四六六へ銀上りて五五筋をしめる口傳あり○敵三筋飛車の時は此方敵王の三筋を攻めて可なり

○第十二章 碁道の洒落

○初王手目の薬○金鷄鳥は唐の雞○猿のけつくわて角計り○二枚替なら歩でも来い○なま角は成り歩に劣る○へボ將基王より飛車を可愛がる○角なり果るは利の當然○銀桂が持ちたる長刀○能い手はヤマケの末にある○金角で拜見あらばとは由良之介の臺詞○下手の勘考休むに似たり○四所雪隠都詰め○斯子遣ると親が泣く○角桂勸樂心のま、○手は何と問はれて頭角ばかり○歩たんどから駒が出る○歩馬鹿新田枳穀の三味線○王手婿しや別れの辛らさ○中飛將軍木曹義仲○負けたを走る晝狐○香に田舎あり○金銀の金縛り○能い香車の振舞都に聞ひ朝敵打ての三大將○其手は桑名の焼き蛤○然うで有馬の水天宮

三十間將碁獨習新法 坤ノ巻尾

版權登錄

年七月十日發行

明治廿六年六月二十八日印刷

定價 三十五錢



版權所有

發行所
愛知縣名古屋市門前町十七番戶 三浦 兼助
愛知縣名古屋市伏見町三十三番戶愛都社 吉田 源次郎
東京市日本橋區通本石町二丁目 覺張 榮三郎
全 淺州區三好町 大川 健吉
京都市三條御幸町角 大谷 仁兵衛
大阪市心齋橋北詰競爭屋 中村 芳松

其中堂發兌圖書販賣所

東京日本橋區通二丁目	大倉孫兵衛	橫山町一丁目	出雲寺書店	三條通御幸町角	大谷仁兵衛
同 通二丁目	小林新兵衛	兩國若松町	柳原友吉	宮小路三條上ル	中村淺吉
同 通三丁目	九善書店	日本橋新大阪町	鶴喜書店	大津	澤川宗次郎
同 通四丁目	金櫻堂	淺草三好町	大川屋鏡吉	四日市	小川善平
同 通四丁目	春陽堂	同廣小路	淺倉久兵衛	桑名	伊藤善太郎
同 通四丁目	東雲堂	本材木町	林平次郎	須原富吉	森島傳四郎
同 南傳馬町一丁目	吉川半七	芝愛宕下町	須原富吉	同	河島書店
同 同	辻本九兵衛	同	須原富吉	同	豐住謹次郎
同 同	青木嵩山堂	飯倉五丁目	森江佐七	松阪	中嘉助
同 同	目黒書店	大阪備後町四丁目	梅原龜七	山田	有文堂
同 同	中川書店	同	吉岡平助	上野	安屋勝二
同 同	山中孝之助	北久太郎町四丁目	柳原喜兵衛	名古屋京町	鈴木吉兵衛
同 同	上田屋書店	博勞町四丁目	中川勘助	本町三丁目	川瀨代助
同 同	中西屋書店	安堂寺町四丁目	青木恒三郎	同五丁目	若山次郎
同 同	開省新堂	心齋橋北詰	中村芳松	玉屋町一丁目	小澤吉三郎
同 同	富山房	本町四丁目	岡本仙助	同二丁目	片野東四郎
同 同	三山堂	京都佛光寺烏丸東	東枝律書房	同三丁目	三輪文次郎
同 同	富山堂	三條通寺町東	福井源次郎	鐵砲町二丁目	尾頭吉次郎
同 同	杉本七堂	寺町通四條上ル	田中治兵衛	門前町二丁目	淺見鉦太郎
同 同	長島書店	寺町通五條上ル	藤井佐兵衛	同三丁目	稻垣勝之丞
同 同	柏屋新次郎	三條通高倉東	出雲寺書店	同四丁目	

大野港	一ノ宮	岐阜	同	大垣	岡崎	足助	知立	豐橋	濱松	袋井	掛川	靜岡	沼津	横濱松ヶ枝町	同 伊勢崎町	同 辨天通三丁目	甲府	鴻ノ巣	東金	千葉	佐原	水戸	
伊東新藏	平松新七	淺野郁文	文港	岡安書房	伊藤小文	近藤久兵衛	加藤巳代吉	高須廣治	齋藤源三郎	明原治	三原屋甚藏	廣瀬市藏	勝見饑助	蘭契	弘集	里見亭太郎	丸屋正	柳島為一郎	長島為一郎	多田屋書店	同 支店	正文堂	川又銀藏
前橋	高崎	仙臺	同	同	山形	鶴ヶ岡	秋田	青森	弘前	八戸	函館	札幌	長岡	同	水原	地蔵堂	高田	富山	高岡	金澤	同	小松	大聖寺
煥平	煥平	佐藤養次	木村文助	佐勘	八文	地主	本問金之助	鎌田書店	野崎九兵衛	浦山書社	魁文	聚文	覺張	目黒	西村六平	江口藤吉	室直三郎	大橋甚吾	車治郎	雲根	池善	宇都宮源平	深城伊三郎
福井	武生	敦賀	長野	松本	諏訪	高山	長濱	彦根	神戸	岡山	尾ノ道	和歌山	廣島	同	松江	徳島	高知	福岡	同	佐賀	熊本	鹿兒島	長崎
品川書店	安立庄三郎	關口平次郎	西澤喜太郎	水琴堂	日進堂	升屋重兵衛	中村藤平	廣田七次郎	熊谷久榮堂	武内彌三郎	三木半兵衛	平井文助	清水庫三郎	友田書店	川岡清助	阪井萬吉	澤本駒吉	積善館支店	林善	河内莊助	長崎次郎	吉田幸兵衛	鶴野書店

